『Nonfiction(ノンフィクション)』

祖父:謙祐の「ノート」

彼が二十歳の頃
西暦 1900 年（明治 33～34 年）

現在の一橋大学の前身

「(東京)高等商業学校予科」倫理学講義から

訳:日根乃主　もっタリ

（初版:改訂 21）

２０１７年５月２４日

まえがき

祖父謙祐（1880～1955）**が 20 歳の頃、彼の生涯で唯一残し、仏壇の中で埋もれていた一冊のノート・・・**
彼の孫である私が読み解いてみて、こんなメッセージを残してくれたことに、少しばかり感動を覚えました。

明治 33～34 年（西暦 1900 年頃）に現在の一ツ橋大学の前身「（東京）高等商業学校予科」に通い、
倫理学の講義を聴講し、口述を必死に書き取った、彼の唯一の宝物だったようです。

彼のノートは、文語調で書き記し、走り書きで誤字や略字などで文章表現の補足に苦労しました。

彼のノートには倫理とは「人生の理想を追求するもの」で、哲学や道徳とは異なるものと考えて、
又、倫理には学問と実践があって、両者が一体となって、はじめて達成出来るものと信じています。

「士農工商」の封建社会から明治の文明開化に刺激され、彼が士族のプライドを捨て、岡山県美作での
代々の**家業を捨て、商業起業を志し、中国や満州を駆け巡った青年時代の動機がこの一冊にあった。**

私が 6 歳の頃に祖父は亡くなったので、祖父に対する特別な思い出などは皆無でしたし、
私が20歳の頃は「倫理学」と「哲学」との差などについては全く興味もなく、考えもしませんでした。
60歳を過ぎて、改めてノートを読み返して、彼の熱い青春時代を思い浮かべております。

学問の理想と・・・書生生活における現実とのギャップ（苦悩）についてなど・・・
もしも、今、彼と会話が出来たのなら、当時の武勇伝について聞いてみたい事がたくさんあります。

その後の彼の生き方が・・・本人の人生にとって正しかったか？否か？ではありません。
明治時代の教育と国策・・・、鎖国政策・封建制度が終わり、若者が海外に進出して行った・・・

19 世紀末、菊池謙二郎（教育者）や中島力造（倫理学者）の教えから、彼の書き記したノートに、当時の
若者が行動を起こした動機が窺えるのでは？と思います。

現代の若い人々が、何をどのように感じ取られるのか？とても興味深いです。

2016年2月2日
日根乃主　もっタリ

祖父：謙祐（1880～1955）が残した「ノート」（1900 年頃に書き記した唯一の遺品）から

内容は明治 33 年(20 歳)頃、起業を目指し、上京して貿易商の米井源太郎氏のもとで書生生活をしながら、現在の一ツ橋大学[（東京）高等商業学校予科]に一年間通い、**菊池謙二郎**先生や**中島力造**先生の倫理学講義を聴講し、口述内容を必死に書き記したもので、先生の「**倫理学のすすめ**」について敬慕していることが覗えます、その後の彼の行動に繋がったと思わせる内容です。

祖父：謙祐と兄と母に抱かれた筆者とが収まった唯一の写真[1950 年(昭和 25 年)頃のものです]
　私は祖父を少し誤解をしていたようです。
このノートを読んで、彼の思いが、今になって少しばかり判るような気がします。

　士農工商の封建社会制度が崩壊し、明治の時代に商業起業を目指し、奮い立った謙祐・・・
実家の家業を捨て、起業を思い立ち、一時期を海外の中国上海・満州等を巡ったが、志し半ばで、故郷に戻って隠遁生活を送った・・・

　そんな祖父：謙祐が青年の頃に「人生の理想」に向けて、その思いをノートに記した時代背景を考え合わせて読んでいただければ幸いです。

※菊池謙二郎（1867～1945）について紹介、　明治-昭和時代前期の教育者。

慶応 3 年 1 月 19 日生まれ。二高校長,上海の東亜同文書院教頭などを歴任後,明治 41 年水戸中学の校長となる。大正 10 年舌禍(ぜっか)事件で辞職したが,復職をもとめる生徒の同盟休校がおこった。13 年衆議院議員。晩年は水戸学の研究に没頭した。昭和 20 年 2 月 3 日死去。79 歳。常陸(ひたち)(茨城県)出身。帝国大学卒。編著に「藤田東湖全集」など。

正岡子規の親友が六人あり、子規はこのなかまを、「七変人」と称して得意になっていた。そのメンバーの中に菊池謙二郎は居る、

関甲七郎	陸奥人	、**菊池謙二郎**	常陸人
井林広政	伊予人	、清水則遠	伊予人
秋山真之	伊予人	、神谷豊太郎	紀伊人
正岡常則（子規）	伊予人		

※中島力造（1858-1918）職　業：倫理学者
新島襄の同志社に学び、アメリカ・イギリス・ドイツに留学。東京帝国大文科大学教授となり心理学・倫理学を教える。高等商業学校講師・女子高等師範学校教授を兼任。イギリスの新カント派の**倫理学・自我実言説を日本に紹介した**功績は大きい。

ノートの内容　（謙祐の書生生活におけるメモの中で記した実体験談が興味深かったので、冒頭に移した）

苦学談

明治 33 年(1900 年)5 月 31 日
　先輩は言っていたが「以前は苦学の際は食べるものが無い時は、菜の代わりとして懐中には何も無い為に塩を噛んで飯とし数日間を過したものだが、尚も天は未だ幸福を与えるか試みるに足らずとして遂に唯一以て命を継いできた塩に油を投入し石鹸を作りて然りとも当面屈せずそれを食べた。
一日塩をさらして、油を蒸留して、また、塩を得て食す。」
嗚呼、天は人を試すが如し。人はこれに耐えなければ遂に論説を得ず、記して以て我の金言とする。

明治 33 年(1900 年)10 月 4 日
　先輩が言っていたが「未だ資金が無くて他人の書生であった頃は主人が夜一時二時になっても帰らず、主人の帰りを待って初めて床に就く、眠れるのは二時を過ぎても六時には起床を命じられる、
由って睡眠時間は四時間を割ってしまう。嗚呼、睡眠の短きはそれ俊傑の要求である。
また一日、主人の為に勘定をする、これまでの寝不足が原因で通学を禁ぜられる不名誉を訂される。」
嗚呼、先輩諸氏が言っているが、資金に余裕があることが基本である。

明治 33 年(1900 年)10 月 13 日
　先輩が言っていたが「『今日の高等商業学生の志操を欠くのは皆、育ちが良いとか、家に財力あることだ』と云うが、卒業の後は金財に焦るのみ、高い月給を羨むのみと、卑しいことを云うに忍びない、
到底、人を抑制・禁欲を導き統率する大器将師の才能はない。」
故に常に心しておくことは
「統率将粋の才能を養え。亦、一片の信用を他人より得たることは百万の金を得たるより貴いのである。」
嗚呼、千古不変の志と云うものは亡いのである。

明治 33 年(1900 年)10 月 17 日
　先輩が言っていたが「君は友を択ぶについて友の器も心せよ、人の値打は友によって大きく定まる事である。決して人の評価にこれを注目するべきである。」
嗚呼、先輩の書生生活を示し導いてもらうに懇切に何から何までその如き事をして、彼が完全理想の人物に近い人なのだと思う。嗚呼、何を以て彼の意に報いれば良いのか、只、奮闘勤勉を以て先輩の器となるのみ。
条件、主人の友人が来訪しても決して階上まで導いてはならない、必ず依って応接局、次の局へ通す。
亦、夜他不在は一切厳禁のこと。

明治 33 年(1900 年)11 月 23 日の夜、病床の先輩から訓戒をいただいた、
　曰く、「青年一分の間違いをしてしまったら、老年には百日の後悔となる。嗚呼、汝如き単純軽弱の者は要々誘惑に陥り易い、それは夜の交際の一事、良々心にすべし、誤り易し。」
私は己の欠点を止めるに叱責されるところ、先輩は親切に何度も示されてきた。
この夜も電話取り次ぎ対応を戒められた。私が来てからこの事を覚えていれば不幸はない。
There was so many inquiries. It is unfortunately, but my mind ran beforehand.
All any late this evening was unhopeful eve.

明治 34 年(1901 年) 1 月 5 日
　先輩が戒めて曰く「汝、未だ世間に甚だ長ぜず宣教俗事秘め事に至るまで充分注意することである。
視る度に汝が軽率にも強引にならず、愉快的にならず、或いは学業において成功しても、
Business には愚かとなる、強引になるな、俗事に注意せよ。」
(取り次ぎに充分、先方を問い質すべし、電話を整然、応対は明瞭、簡単にすべし、Common sense 「常識」を達する)

明治 34 年(1901 年) 5 月 8 日
　菊池謙二郎先生を駿河台袋町に同僚の日下と宿屋に訪問する。
先生は今回は（上海の）東亜同矢館の教頭として赴任の途中である。　この日、菊池先生が曰く
「君等、そもそも精神の修養と身体の健康に注意すべし、男児の事業･宣教必ず確固たる精神と
健全なる身体になかったら成功を治めることはできない。
そもそも耐え忍び不屈の精神こそが最も大切である、汝ら、商業界に飛躍しようとする者は頻繁に
外国貿易を成し、外国の財を輸入すべきだ。　乱れて富国たるを忘れて、そむき国内における御用商人
となる志望を身近な出世とするようではダメだ。　汝ら、今日の境遇は恩人の保養が基本にあるのである。
決して精神的に人に依存することなく、衣食を書生時代に他より貸し借りし交流することは、
これは独立心が無いのではない。　後進を率いるのは志望の義務なのである」と。

明治 34 年(1901 年)6 月 27 日
　先輩は大いに私を戒めた。
自らが自身の悪性を自覚し、我業の成・不成はこの性質を止めるか？否か？にある。
その悪性とは
　　１：過失を隠蔽することの卑劣、
　　２：ゴマカシ、
　　３：現地位に忠実なる事、
　　４：その任を度重ねる事、
　　５：優柔不断なる事、
　　６：公明なる事、
　　７：あくびをする事、
　　８：陰陽を表さない事、
　　９：勉強する事、
　　10：くだらない交際の癖がある事。

摘要（聴講後に祖父:謙祐が志を持って、中国～朝鮮を訪れた日々の自戒）

南浦（現在、朝鮮民主主義人民共和国 の西部にある都市。平壌の外港として重要な貿易港）での日々･･･

「命も要らぬ、名も要らぬ、官位も要らぬ、金も要らぬ、人は始末に困るなり。」
このような人となら、苦難を共にし、国家の大系を共に語ることができる。

アーサー・ヘルプス曰く
「常に何かを聞き、常に何かを考え、常に何かを学ぶ。これが人生の真の生き方である。」
「何事も切望せず、何事も学ばない者は、生きる資格がない。」

己に何か一つの希望を持つことが重要である。これを求めず又これを欲せず、名誉顕職を直前に迷い、
又恩に報いようとも思わず、唯一学ぶことは、他を思いその度に没頭しようと欲する人こそが甚だ力強くして
当を得ている人なのである。

「世に死して天に生きる！」

詩人ブライアントが云っている、
「自由とは軟らかい風に清き膚をさらす嬋妍なる（うつくしい）少女の如きものにあらずして、
大鐵を探って岩を砕き、猛々しき勇士の如きものである。」

「独立」とは必ずしも「他から援助を絶つ」ことを謂うのではなくて、**「自己の有する総ての実力を活用する」**
ことを謂うのである。

「正義を踏んで猛々しく如くあれ。　君たちも真理を究めんが為に進め。」

He who has conquered his own coward spirit has conquered the whole outward word.

・ソクラテスは　　専ら形のないものの事を究め「邪悪は無智とし、智識に由って至善を得るべき」とした。
・プラトーは　　「霊魂不滅」を説いた。
・アリストテレスは　実験と帰納法を基礎とし「物事を観察して、その記録を蓄積し、性質や特徴を見出しては
　　整理して行き、知識をきちんと体系化して構築して行く」事を研究した。

「信仰」とは必ずしも「神仏を信じる」を謂わずして、**「正義そのものを信じる」**を謂うのである。

エマーソンが云っている、（ラルフ・ワルド・エマーソン「生き抜く成功力」から）
「成功のためには、心境は熱く荒れた地にあっても、対応する術・方法があれば余裕・静寂の境地にあるものだ。」

「心は明鏡止水の如くあれ」　※（荘子「邪念が無く、静かに落ち着いて澄みきった心を持つこと」）

　さて、これから先のページ(祖父のノート本文)は出来るだけ忠実に書き著すことに努めました。
なにせ、明治時代(1900 年頃)の青年が書き留めた、文語調の走り書きですので、誤字･脱字等、
理解が難しいものと思い、倫理実践の要点である「中島力蔵先生･最後の講義」を私なりの理解で
「あとがき」に記すこととしました。

本文読破に苦痛を感じる方々は42ページまで読み飛ばしていただいても結構です。

この講座の目標はまえがきに示したように**「人生の理想とは？」**にありました。

このノートでは**「人生の理想」に対して「人格の実現である」**と結論付けています。

（中島力造先生が示した、イギリスの新カント派の倫理学･自我実言説を窺わせる内容です）

「人生の豊かさとは？」･･･何だろう･･･

皆さんが**「自分の人生とはいったい何だろう？」「人生の意味？」**を考えたくなった時に、

想いを巡らせる心の余裕をお持ちであれば･･･一読願えれば幸いです。

（明治時代の教育者たちが説いた「ことば」を垣間見ることが出来るかも･･･）

ノートの内容（倫理学講義）

1）倫理学定義

倫理学（Ethics）は**「人の行為･意志の正邪･善悪を論究指定する」**学問である。
その語源を辿れば**風俗習慣**(Ethnic)を意味するギリシャ語より英国に渡り倫理：Ethics となり、
又、**行為作法**を意味するラテン語の Moral なる語と共に伝来し、今日、**人類の道徳**に関する学問に
敬用するに至った。（従って、哲学：Philosophy とは区別される）

2）倫理学の性質

倫理の道理は理論に属し、倫理の術は実際に属する、
故に事物の道理を研究するものは理論にして実際に用いる方法を講習するものは術なり、
由って今日の倫理学は何れに属するかを考えるに理論と術との両者に関係するものである、
即ち正邪善悪の道理を講究するに理論と術のどちらか片面が欠ければ単に論理と云うべし、
直接に実際上の行為挙動を論究するだけでは術とは云えない、
更にこれを考えれば倫理学としては人類資稟の道を牽制する天理天則を研くものとして
範囲は広く術としては各国々の民の尊守すべき特質を発掘し、
理論の裏付けを基に、之を実践する事はその範囲の狭く窮屈となるかも知れないが
これを要すると術と学とは旨くその範囲の広狭を区別することなく用いることができるのである。

- 倫理
  - 人類自然法
    - 人類資稟の道
    - 原理
    - 広　（天理天則）
  - 人意法
    - 義務　・・・・　国民が純粋に有する（国体の精華）感情
    - 義務学　・・・・　尊守窮行するべき訓典

3）倫理学と政治学の関係

人は社会的動物にしてその他の動物と異なる所は衆人協同風俗にて社会を成し、国家を成すにあり。
その意味で社会･国家なるものは一個人の集合体に他ならないが、その集合体の上に直に学理を研く
ものは政治学である。政治学は国家の機関運動を講ずる学なれば、倫理学と同じく人類の目的
即ち、意志正邪を論ずるのだが、倫理学と政治学とは、ちょっと違うのである。
倫理学は一個人の上に目的意思を論じ、政治学は社会・国家の上にその目的意思を論ずるの差異あり。
例えば倫理学においては社会･国家に対する義務を説くことがあっても、一個人として
その関係を示すに過ぎないのである、例えば古代中国の孔子・孟子の教えの如し。

4）西洋における倫理薦達の順次

西洋の古代薦達の思想は天地自然の道理を追求するを以て目的としたので、ただ広漠に失したり。
ソクラテス以後は人品の自立的倫理を説きたるを以て是より、一個人上において目的意思を極めるが如き、
実際には偏った説となった。
中世においてはキリスト教の布教と共に学理は地に落ち、一般的に倫理学は宗教目的に偏った。
第一に禁欲厭世を以て標準とした。近世には上の二代を混化し更に科学の進歩と共に学理上より
説を変えて人生の目的意思を論ずるに至れり。

現今迄に行われたる説を区割りすれば下のごとく示す。

第一　**目的論**（Theory of End　）
第二　**標準論**（Theory of Standard）
第三　**良心論**（Theory of Conscience）
第四　**意思論**（Theory of Will）
第五　**行為論**（Theory of Conduct　）
第六　**規律論**（Theory of Low）

純理
心理
学理

に依りてその行形に表した

第一：**目的論**　・・・人の目的は幸福を求めるべきものか？又非とすべきものなるか？
第二：**標準論**　・・・いわゆる善とか悪とかは如何なるものか？

第三：**良心論**　・・・人が如何にして起表するものか？
第四：**意思**論　・・・本心と本心に働く意思との関係が如何なるものか？

第五：**行為論**　・・・外的薦育の主たる事実を研くもの？
第六：**規律論**　・・・道徳規律性質を研くもの？

第一：**目的論**

（1）：人の此の世に存在する（一般に）目的とする価値を持つべきである、
その目的を持たない者は此の世に生存する理由が有らず、
政治・道徳、皆この目的を達する方法に外ならず、これを人生究極の目的と云うなり。

（2）：目的が如何によるかは概してこれを二つに分けることができる、
その一つは**人生に一定の目的あり**と、その他は**人生に一定の目的なし**。

（3）：**一定の目的なし**と称する論意は
（イ）懐疑論者は天地万物の既存を疑い論理志操の規則を疑い遂に万事万境は知るべからず、
遂に**人生は虚無なり**と結論する。
（ロ）宇宙論者は人類を以て宇宙万物の一小部分として人為の規則は**宇宙万物の規則なり**と称する
を以て宇宙の目的を切り離して人為の目的は別に在ることはない。
（ハ）進化論者は此の世界は変遷進化して止まらざるものなし、人為の目的の如きも変遷して
一定不変の目的はなしと論ずるに止まり、必ずしも絶対的に目的無しとは云えない。

（4）：**一定の目的あり**との論拠はこれを幸福論者と称し二派に分ける、
一つは**自己一人の幸福を目的とする**論で、英国に起き**自克教**若しくは**利己主義**と云う、
他の一つは**社会の幸福を主とする**論にてフランスに起こった**功利教**若しくは**実利主義**と云う。

（5）：以上の説に反対する者は非幸福論者である。
これらの論者は**幸福の目的を定めるべきではない**と論じて智識･理想･正義･中庸(平凡)等の
(人生には)種々の目的を云うに至る。
例えば、ソクラテスは智識を進むるを以て目的とし、
プラトーは理恵に達するを目的とし、
アリストテレスは中庸（平凡）を得るを目的とし、
ストア学派の唱えるのは天命を尊い正義を守るを目的とした。
釈迦は感障を断滅して涅槃に入るを最終の目的とする。(涅槃は悟りと同じ)
孔子は大学において論評することが至善に止るを目的とした。
老子・荘子は無為に帰することを人生の目的とした。

要するに全般幸福に反対論をとるものと、幸福の一部分を許すものの、二つの派に分かれる、
(キュニコス[Cynic]学派)は幸福に対して反対の論者にして、欲念を絶つを以て目的とした。
(ストア学派)ソクラテスその他の説は諸善諸徳の完全した者には自ら幸福を共に完成する者
に対して幸福を得んと欲すれば諸善諸徳を修めることができない。
故に幸福を神聖な目的とするしかないのである。

（6）：非幸福論者の幸福論に封する弁説

1．幸福は人生唯一の目的に非ず。　（人生唯一の目的とはならない）

2．人々の幸福はそれぞれ各個別にして一定ではない。（人、それぞれ個別のものである）

3．古来経験の結果に過ぎず、未来のものは非である。（過去の経験則であり､未来を予測不可）

4．幸福の性質、分量等は定まっていない。　（定性化・定量化ができない）

（7）：幸福論者の答弁

1．幸福に反封するを以て目的となすが如くなれども、人生を充実することは出来ない。
例えば欲を殺して仁をなし,苦行をして道を求むる、これ幸福に反封するが如くなり、
その人の本心に入りて考えれば、自ら幸福を求むる目的なり、
人々の心性作用には習慣連合の規律ありて、幸福に関係なき徳義を目的とするものなし、
故に幸福は人生唯一の目的と云うべし。

2．弁論は物柄の相違にして幸福の相違に非ず往々これに反封するもこれを通則となすべからず
（例えば妻子を案じ或い富貴を楽しむものあり、これも事柄は相違だが、幸福の点に於いて同じ）
故に皆さんは可成る、その品位を高尚とし、一般に普及すべし。

3．将来の目的については将来の経験を参考にするより外なし、太古より経験上徐々に幸福に
連なる方法を求めたるを以て社会・人類共に繁栄して今日に至っている、
若しこれに反封して経験を放棄すれば世界は暗黒に帰すし故に人生の目的は経験の結果に
依るべきではない。

4．皆さんは「経験あるを以てどのような行為が幸福利益となる」を判知するは容易ですが、
又これに由って行為と目的とが適合するや否やを判定することも容易ですが、しかしながら、
幸福の性質分量を算定するは難しい。

第二：**標準論**

標準論とは人間の行為に実する善悪正邪の標準にして己に人間の目的を論定したれば自ら標準の何たるを推知すべきなり。則ちその目的に合するものを善としこれに反するものを悪とする。故に目的即ち標準なりと云うを得るべし、古来の所説数々あるのでここに記述する。

（1）**天･神を以て標準とする**。この説は古来の説なるも今日もその説を唱えるものあり、即ちキリスト教の道徳はこれなり、その説は天･神の命を以て唯一の標準となし、その命に合すればこれを善とし、その命に反すればこれを悪とする。

（2）**天命を以て標準とする**。この説は形而はたくさん有る、自然の規則、即ち所謂は天則なるものを以て標準と立てる説にして西洋に在ってはソクラテス、東洋に在っては孔子・孟子などこの説を唱えるなり。

（3）**君主を以て標準とする**。この説は英国の哲学者ホッブスの説にして天･神の実体は遠く皆さんの外にあって目の前に姿を現わすことはない。　又、その所在を審らかにすれば果たして人を覚罪する可否を知らなくても君主は目前に在り、直接に皆さんを命令、覚罰するものなれば、これを標準とする。

（4）**道理を以て標準とする**。かの有名なカントの所説にしてこの説は言行相合する行為はこれを善とし、相反する行為はこれを悪とし、その行為を判定するは道理の作用によると論定する。

（5）**道念を以て標準とする**。この説はインドの仏陀　及び　孔子・孟子の説にして、道念即ち良心とは皆さんが現生で善悪正邪を判別し善の求めから悪の偏りを知ることの本能力を云うなり、孟子が謂うところの良知良能これなり、すなわち心の命令判断によりて行為の善悪を裁定すべしとの説なり。

（6）**自我を以て標準となす**。これはフランスの哲学者モンテスキューの説にして人の道徳は自我自愛の心より生じ、愛他も兼愛も皆自我に外ならず、その人を愛するが如きその人を自ら愛することを欲してこれを行うものとなるのである。

（7）**利他をすてることを標準とする**。これは英国リードの説にして利他の行為は善にして、自利の行為は悪なりと説けり。

（8）**功利を以て標準となす**。これはフランスのベルクソンの説にして自利・利他の両説を合わせて社会一般の幸福を以て人生の目的と成し、これを道徳の標準となす。
故にこの目的を助ける行為はこれを善とし、防ぐる行為をこれを悪となせり。

（9）**進化論**。　英国のスペンサーの説にして人は下等動物より進化して来たれるものなれば道徳の如きも下求動物の進化したるものに外ならず、故に今日、皆さんの道徳上の行為と称すべきものと伴にその標準と云うものは動物界に存するものとは大きく異なり、その発達の前後異なるを以て唯一その則を欠けるのみ、即ち道徳は未だ発達せざるものにして人類は既に発達したるものなり。
例えば動物は苦楽の感覚を有するのみにて、未だ善悪の志操を有しないが、発達すれば人類の如き善悪の志操を有することになる。
その考え方の発想は生存を保全しようと欲して進化するにあり、目的は生存を保護するに外ならず、これを以て善悪の標準も生存保全に至ることになる。
従って、生存に利ある行為挙動は善にして、害ある行為挙動は悪なりと説けり。

第三：**良心論**

（1）：良心とは何でしょうか？

世の古今を問わず国の存否を論ずる、人類たるものは必ず多少の道徳心を有しているのだ、即ち人は皆、善を善とし悪を悪とし、善を以て求め悪を以て避けるべきを分ける能力で、先天的に善悪を区別する、即ちこれらの判断力及び感応を名づけて**良心**と称する。

これを論ずるに二種類ある、（一つは本位論と云い、他は経験論と云う）

（2）：本位論とは何でしょうか？

(A) 皆さんの善悪を判定するは早時直接に起こり決してこれを判定するに当たり思考推究するを要せず。目を合せて以て欠ければ直ちにその黒白を判り、皮膚を以て暖かき物に接すれば言下の先んずるが如くその心に推究して終始を判定するに至る。

これを人に**本位の良心**なる所である。

(B) 道徳心は人類共有の性質にして人たるものは皆同一に善悪を判定する能力を有し、善を悦び悪を避けるべきを知っている、これは**人の生来の道徳心**を具わるを知るべし。

(C) 生来、道徳の教育を受けず平素不良の習慣に接するものも、尚道徳の本心をば有して善悪を判別することを人為に**本位の良心**有るが故なり。

（3）：経験論とは何でしょうか？

(A) 善悪の判定は人の即時に覚先するものなるも、これ未だ天宗の能力とは云えない。

その人の心の性質作用は経験数回に及べば思考を付け直ちに判定することを云う。

例えば裁判官が訴訟事を審判するが如し。

経験に乏しければ思考を付け始めて理屈で判定するも、経験数回に渡れば感覚の力で即時に判決したるに及ぶべし、又行為の善悪は容易に判定すると云っても学識の行為に限られるものとして、複雑なるものに於いてはその善悪を判定することは甚だ難しい、故に**経験を持って始めて良心を形成する**ものなり。

(B) 道徳心は人類共有の性質なりと云うもその概要なるものに過ぎず、その微細なるものに於いては必ずこれの**経験を持ちて良心を形成する**ものなり。

(C)不良の習慣に接するも尚良心を失わずと云えども、諺に「朱に交われば赤くなる、悪人に交われば悪人となる」と云うように、**経験を持って良心を形成する**ものなり。

第四：**意志論**

（1）：意志とは何でしょうか？

意志とは心を解釈し外に対し発示する行為挙動に与える名称にして己に行為上に示したる挙動のみならず、未だ示せざるもその方向に進まんとする心を解釈する作用は総じてなり。
言い換えれば意志は必ずなさんとする目的を有するものなれば、
目的のある心の解釈作用のことである。

（2）：意志の分類及び道徳との関係

意志はこれを分けて単複の二種若しくは内外の各作用に分類される。

(A)内作用とは未だ外界に示していない内界の心を解釈する方向目的を云う。

(B)外作用とは己に示したる行為挙動を云う。

(C)単意とは単純の意志を義とし、他の作用の混入しないものを云う。
（例えば小児の挙動の如し）

(D)複意とは複雑の意志を義とし、知力感情の多少混入したるもの。
（例えば成人の行為の如し）

今道徳の如きはこの内外多作用に関係して複意に属するものなり、その複意の上に善悪を論ずれば道徳となるなり。これ道徳を論ずるもの二派となる。
一つは**自由意志論**と云い、他は**必須意志論**と云う。

（3）：**自由意志**とは何でしょうか？

自由意志とは皆さんの有する自裁･自断･自択･自制の力に与えられる名称である。
その力が自由を称するものなり。その説に由れば、例えば、皆さんの行為の中のその一つを捨てて他を選択作用の如き、及び、己を制して善に帰る克己作用の如きは、
皆人生に一種独立した意志の力ありを決断命令を下すものであって、当時の諸事情･原因に由って起こるものではないと説いている。

（4）：**必須意志**とは何でしょうか？

必須意志とは宇宙万有の規則に基づくものとして原因･結果の理にかない、
一時一物原因事情を待って生起するものとなるのである。
例えば苦も楽も両方あるのは人も獣も普通一般の性質にして人類の行為挙動を進めるのはある苦を去りて楽を求めんとするからである。この苦楽には種々の事情があり、
即ち、感覚の苦楽、情緒の苦楽、恵像の苦楽、現在一時の苦楽、未来究竟の苦楽等がある。
この諸苦諸楽が相互に加減してその結果、一つの方向に心を動かせることになる。
これを動機と称する。この動機に由りて意志の作用を表す、故にその作用は内界の事情より生ずる結果である。
例えば毎日の晴雨の如し。人界の波風は当底停止する構えはない、
更に克対抗し、克憂慮し、克選定し、克決断し得たるも即ち、これ意思の作用である。
故に意志の諸作用は皆内外の事情より生ずる結果である。

第五：**行為論**

（1）　行為の性質

古来の道徳論者は人間特有の性質にしてその有無を以て人獣の別を定めているが、
今日進化論が起こるに当たり、人類特有の道徳より発達進化したるものと云える。
道徳上の行為は同一人類の中でも古代と今日とでは大きく異なり、
蛮民の如きはその挙動道徳を知らないことから、獣との差別を欠けてしまう。
要するに道徳の有無に由って人と獣の境界とすることは出来ない。

（2）　道徳の進化は如何にや？

地球上に生活を有するものは全ての獣・虫・魚を問わず必ず多少の挙動の伝達して
一定の目的を有することを行為と云う。
行為が進化して善について悪を避けることが正しければ徳行即ち道徳上の行為と云う。
例えば魚が偶然水中に泳ぐは目的なき挙動にして、それを食として求むるは目的ある
挙動である、食物連鎖の如く漸々高等の動物におよびて進歩発達したるものである。
人類は種族の生存を定めとし、他の動物は自己の生存を定めとする、人類の種族生存
を全てとする行為は進歩発達したる道徳上の行為と云うべきである。

（3）　行為と社会との関係

人類はその初期にあっては獣の如く各々が離れて居住し未だ一家一社会を成すに
至っていないが、人口増加に伴い自然の勢いで群居するに至れり、さらに競争淘汰の
結果、互いに団結することになる。社会団結の今日にあっては自身の生存を保全しよう
とすれば必ず他人の利益をも計算するものである。
我より他人を愛すれば他人も又我を愛し、我が他人を害すれば又他人も我を害する。
依って他人を愛する行為は善なり、自己を利する行為は悪なるの習慣を養成すること。
これ利他博愛の道徳上の行為なり、もし他人を愛することの本心は自身を愛するの情
より出たるものなれば、故に利他博愛は自愛の究極の姿である。

第六：規律論（Low　of　Ethics）

（1）：倫理上規律とは何でしょうか？

倫理において規律と称するものは皆さんの実行上良心の命令により確定したものを云う。
規律の範囲を大別すると１．自然律　２．宗教律　３．政治律　４．道徳律

（2）：上の四律を累評すれば

(A)自然律とは天地万物の規律にして宇宙の大流、若しくは万有の天則となるものであり、
この規律は皆さんが決して抵抗してはならない、又破壊してはならないものです。

(B)宗教律とは宗教上で定めるものにして、天神の命令によりて成り、天神の意志により
賞罰を与えるものである。

(C)政治律とは一国の政府若しくは主権者に由って定められたる法律にしてこれを犯す
ものに対して賞罰するものである。

(D)道徳律とは道徳上の規則にして善悪の行為を制裁するに社会の上に規律を定めるもの。
道徳律は宗教と政治との関わりで、この道徳律実施の功罪が影響を受ける、今日は
宗教律と政治律を分離して独立した道徳規律の上に賞罰の法を完成すべきである。

（３）：道徳規律上賞罰の方法とは何でしょうか？

古来の政治宗教を分離して目前の現在社会の上にこれを求めれば概して二種あり。

(A) 国の法律上より来たるものにしてこれを法律的賞罰と云う。

(B) 社会朋友との信用名誉上より来たるもので、これを社会的賞罰と云う。

道徳上の賞罰はこの両者を経て始めてその者に付くものである、故にこの規律を守る中は賞するも又この両者を以て行う、これは外界より来る関係の賞罰にして更に自己の身心上直接に受ける賞罰があることを知っておくべきである。

（４）：自己直接賞罰とは何でしょうか？

概して二種あり。

(A) 肉体上に関するもの、欲を制し徳を修めれば心身爽快を覚えこれは自己への賞なり、暴飲過食放蕩遊興なれば心と共に肉体も失う。これは自ら賞罰することである。

(B) 精神上で生ずる直接の賞罰、不正・不法をしない者はその心は常に安らかである。これに反すれば自ら内に鑑みて将来の苦痛を感じて安心することが出来ない。

道徳を大成する方法として前述の規律があれども皆さんがこれに対する義務を実行すれば、人類の本来の義務を尽くしたと云うべきである。

（５）：義務とは何でしょうか？

皆さんが実行しなくてはならない事であって、これを区別すれば

(A) 自己に対する義務（個人的義務）

(B) 他人に対する義務（社会的義務）

要するに教育法にして徳の進歩の境地に達すれば人は益々善を求め悪を避ける、即ち良心が薦達するに当たって自然に他の方法に由らなくても義務を守るに至るべし、ここで云う義務とは徳と称するものがあり、自然に外界に向けて制御するものである。その根本である徳と義務との関係を知っておくべきである。

（６）：徳と義務との関係

徳とは人・心の中の吾を行為とする一種の習慣にして義務を完全にすべきものを云う、その関係を表にすれば、徳は心の内の性質、義務は心の外の行為、これに由って考えれば徳と義務とは内外表裏の関係であって、道徳規律の関係を示す

社会的義務
- 仁愛の徳　・・・　（仁）
- 正義の徳
- 誠信の徳

個人的義務
- 節制の徳
- 清浄の徳
- 勇気の徳　・・・　（勇）
- 智慮の徳　・・・　（智）

孔子・孟子の教えはこれを（仁）（勇）（智）の三徳に分けて論じている。

ソクラテスは云っている。形而上の事象への考え方を研くこと。（無智の智）

邪悪を以て無智となし、智識に由って始めて至善を徳となすべきである。

倫理の大系

（空欄） 後日、彼が体系図を作ろうとして空けたものか？・・・

目的論　　幸福・・・実践定義
標準　　真理を標準とする。

（実践倫理宿題）

１．我国の根本的倫理思想は如何に？
２．愛国心を孝養する方法は？
３．「人物」とは如何なる性格を備わるものを云うか？
４．公徳・私徳を判別して実例を示せ？
５．自主心とは如何なるものなりや？実践上の実例を示せ？

高等商業学校予科（存在期間 1887 年[明治 20 年]10 月～1902 年[明治 35 年]3 月）「現在の一ツ橋大学」

商業道徳について　　（本科 3 年、予科 1 年）

理想

今後は如何なる事業を起こすにも道徳的主義を有すべきである。これを欠けるは全く人とは謂えない。（古来の士農工商の時代は終わり）商であれ、工であれ、農であれ、主義無くして人為の資質に欠ける事象あるのみならず、事業の成功に関して往昔我国においては家業に就くものはこれを欠いても差は無いのだけれど、その上流即ち士族においては道徳主義となる武士道がある。
古来封建の時代にあっては農工商においては総じて一つの人為として、上流即ち士族等の命に服従して動作し恰も奴隷の如くして充分なる権利を持つ事になる。
しかるに、現在知能の充分発達し丁度の年に至りたるものは多彩なる職業が何たるを問わず権利平等となれば一律に法廷に立ったとしても各人各自の権利に差はない。
その如く権利主張の今日、その権利は有すると云えどもそれをうまく運用するには必ず一定の主義を以て行っている、もし道徳上の主義を定義することは容易くはない、
すなわち一生涯の万物境遇もまたその主義の如何に由るかを定まるものである。
現在各個人の主義はその就職の変化に応じてその定義も変遷する。
それらの中には絶対に主義なる観念を有しない者さえあり、実に彼らはあわれむべきものなり。
然るに、皆さんが青年であるこの時期こそが各自の主義を確立する好ましい時期なのである。
今に及んで確立すべきではないことを好しと云って、簡単に軽々しく定めるべきものではない、
一生の大計なり。然れば宜しく深慮遠謀(遠い先のことまで深く考え、しっかりと計画を立てる)を要する。
思うに、近年我々国民にして断固たる主義理想を有するもの、あるいは古い昔の封建の時代には一般の人の知恵が未だ薦達せず特殊の階級を重用していてはそのうちに自らの主義を持ってしまう。
然るに、現在の社会にては、古来の服従的理想もなければ、また、各自が信じる主義を有するでも無く理想に迷いつつあるものにしては、例えば古代の人に比べて物質的開花、及び智識薦達は著しいと云っても、理想においては或いは古代の人に一歩先を示すことも出来ないのか、
嗚呼、全世界は如何程、物質的な開放を成し遂げ人智の薦達するも理想なくして何ぞ事は成らんや。
第一理想なき者は人生に栓をして勇気なきなり。人は一定の目的、理想があればこそ今日の困難もおさえることが出来る、もしくは人にして我が理想とする。
如何にして自前の困難に耐えざれし、これ即ち道徳的の勇気あらざるものなり、
また主義理想なきものは勇ならざるのみならず、その人の品性下等なり、故に例え富豪を極めると云えども理想とする姿ありて主義が定まらない者は他より尊敬を受けるのは少ない。
即ち軽蔑視されるなり。また無主義の人は商業において下品になるのみにあらず、
常に小心くよくよとして泰然たる姿なり、遂に彼が浅底を顔色に顕著にするに至る、
また一定の理想を有して主義あるものは悠々小事に拘泥せず、困難に堪えて大事を成すと云えども無主義の人は心常に短気、狭き度胸にして、小難に屈して遂に大業を逃してしまう、不能なり。
また、無主義の人は物に早とちりして周知綿密ではない主義を有し理想とする姿がみられ、
必ず事物を観る綿密にしてその利害に関するものを処理するにまさに人の困るほどなり、
今後の社会にてはどんな職業を採るにも用意周到であるべきです。また理想なければ遠大の志望を抱くことは不可能です、只、目前の小利小成に心安ずるとするものなり。古来国土の狭小なるが故か島国的根性として精神萎縮し所謂を述べない者が多し、如何にしてか西洋先進国の民と対等に主義を論ずるか、従って自重自戒の心が欠けていることによるものなのだ。

現今、我国の人はこの自重自戒の心に乏しいとは往々にして外人の評するところにして自重自戒心のない国民は小国の民である。
この自重自戒心は往々にして誤まった自負心となり、或いは放漫剛直と変ずることがある。
その結果として小成に安心してしまうことになる、理想主義のないものは人生至高の楽しみを
知らざるなり、飽食暖衣の知覚的快楽を極めるも、決して人生至上の楽ではない。
人生至上の楽とは、つまり、良心の楽である。良心の楽とは即ち金銭の関係なら法律の支配を受けず
佳い心の上に快く感じることを云う。これは良心の楽を人が有することで獣と異なるところである。
人に主義あれば、更に品性上品にして業為潔白にして正直なるを以て人の信用を得るなり。
信用ほど財産・価値の大きなものはない。むしろ百万の金を持つよりも自身に一片の信用があれば
人は富裕である。
由って信用の無い社会は栄えないものである。信用の有る社会には互いの信用を以て遂に確固たる事業
を起こするに易い。これが信用社会の栄える所次である。
以上の如き述べてきたが、人生理想とするところ無く主義を有せずして生活することをしてはならない。
その理想主義を確立するについては人生の本性に鑑みて定めるべきです。
世の中の人はぞくぞくと自己従来の理想主義を昇り近ければ、変えて他の主義にたよるかと思う。
また、今の主義は小であり、進めて大なる主義理想を得ようと終始一定の主義を無くして変貌が定まらないのは未だ以て終生守るべき確たる主義が無い為である。
人は必ず一時一次の主義を立てるには意志行為一定せず軽浮の人となり果ててしまうものです。
故に、主義を建てようと始めるに当たって確固たるものを樹立し終身一貫の主義を取るべきです。
それを樹立するには智識の判断を要するなり。まず智識に二種あり。
曰く、普遍の智識（Common knowledge） と 合理的又科学的知識(Rational knowledge or Scientific knowledge)である。
Common knowledge は万物の己に発現した現象によって認められる智識能力にして、
Rational knowledge は一歩遍じてその現象の裏面に存在する原因・法則・原理等を認められる知識能力にして、尚も云えば一つの事実に付随の現象を確かめ次に種々の試験研究に由って確たる原理を求める知識である。 この智識に由らなければ確たる一定の主義を得ることはできない。
皆さんは種々の智識学問と云うものを大別して三種あることを知って欲しい。

第一：宇宙万有物に関する学問
　　物理的学問とは博物学等々にして動きが無く、鉱物的な物質に関する学問である。
　　（実際には、スタティックな分野とダイナミックな分野が有り、誤っている）
第二：社会に対する学問
　　社会学は謂う所の、政治、法律、経済などの学問である。
第三：心意的に昇する学問
　　心意学問とは人間形成の心意に関する学問にして心理学、哲学等である。

以上の三者の学問智識が平行して進めれば円満完全の人物となる。
若し、三者の平行薦達を欠き不平均の進歩をして偏った人となったら、
第一種は品行修まらず理想を有する人となることは出来ないし、終生私利にのみ配し私欲の輩となる。
第二種は前記第一種の偏った道徳心にのみ固着して狭益偏屈の遍々たる小人となり果て、
　　社会の出ては労働は可能な人物となることとなる。

現今日本の物質的文明は非常に進歩したるも道徳心等徳育精神上の薦達はこれに及ばず依然として
天保時代の道徳観念に従服しているのである。
西洋先進国の物質的文明に幻惑されこれを挿入するに汲々として未だ真意を視ることが出来ない。
かの徳川時代においては学問はもっぱら徳育養成にあった、むしろ現在に勝る道徳観念が薦達していた
と云える、これ日本が明治維新後に偏った進歩をしてしまったが故に、皆さんは心意的文明進歩を考えるべきで、
即ち終始一貫の主義理想を確立すべきである。
その主義を樹立するには Rational knowledge（理性のある知識）を以て判断すべきである。

皆さんの理想主義又はあるべきものの要点
第一：終生一貫の主義理想を択ぶべきである。
人は往々にして彼が青年時代の主義は中年に至っては不利となって更に新主義をとり、
老年に及んではまた更にその年代に応じて適当の主義を択ぶことになる。
遂には己が一貫の主義なくして人生を終ってしまうことになる。
これは初めにおいて熟慮し確たる主義を固定することで由しとする。故に初めに当たって
生涯如何なる状態の時にも変わらない主義を択ぶべきである。
第二：社会には必ず貧富貴賊の階級があり、自己の主義はその違いの如何に関わらず一定の主義を
以て進んで不都合のない主義を要する。
第三：主義について一方の彼らに適切であっても、他方の此方にては不適当となると云う如きの
事に当たりて変更を要するが如き前後無順のものである。必ずどんな場合も一定の主義にて
貫徹するが如きの主義を要する。
第四：自己の主義とするには現世において実行できるものにして決して空想のみで如何に適当な
理想にして絵も仙境に行ったような如き不実用のものであってはならない。
第五：主義は上昇的即ち一旦翻ってその理想を掲げれば心神高尚となるが如きものが与えられる。
第六：主義は偏った主義に固守してめめしく主義を保守し尊ぶも可ではあるが一時な好奇心で軽率な
保守妄信に偏って後々その基礎を固めて着々として進歩する主義とすべきではない。
第七：その国の体制及び社会の共同理想に背を向けないように社会と相順ずる主義であるべきである。
第八：古来儒教は道徳心と金欲とは全く関係なく、かえって金は徳心の妨害であると思っても、
今日より道徳観念を完全にするには必ずその活動中に金のみを除去すると云う訳には行かず、
さすれば主義は宣教経論上にも利あるものを取るべきである。
第九：吾人の心意は一定の法則によって働きつつあるものにしてそれを研究するのは即ち心理学なり、
主義はその心意の法則に叶うものであるべきである。
第十：古来我国の教えには徳の心と肉体とは一向に関係ないと如く云っても、今日科学の薦達より
必ず心意は肉体があって初めて在るものにして肉体を貫通せずして作用する心意はない。
故に主義理想も身体の？？養生に叶うものにして控えめにもこれに反するものではない。
第十一：主義理想は心を優美高尚を養生するものである。この後の俗務繁忙の中にあっては、
この軽挙を養うあるいは日本人には養う力が無ければ,今に至って優美の性を養う様に
注意すべきである。　なぜなら、金策の奴隷と成り果てる。

主義理想は目的より来たり、目的はその物の性質及び構造に応じて定まるものである。
故に人の主義理想を作るには人の性質又人は如何なるものより成立するかを先ず知るべきである。

つまり、人間は下の三ヶ条より成立するのである。

第一：肉体を鍛えること。(健全な身体が基本)

第二：人であると称する者は心意を有する。

第三：人生は此の世において孤立し独往することはできない、即ち人は社会的動物である。

以上の三者を明らかにすれば確固たる完全の主義を律することができる。

第一、人生の中で肉体は道徳上欠くことのできないものにして、心と肉体とは両立し相応すれば
それぞれが単独にはその用をなさない、お互いに個別ではない関係を有している。
然るに古来東洋の倫理学上、肉体と道徳心は全く別者の如くに考えて徳育は決して体育を別もの
にしている。あえて、体育の不足は徳育の発達の上で誤解をしている。
そのようにして一向に体育に注意しない弊害の証として今日の東洋人の体格が西洋人のものに比べ
劣等にしてこれを思えば前途急遽に対策する必要がある。
身体即ち基礎の健全なるは例え一時の誉を有するとも永久の勝利は身体のなすべきものである
東洋人は四十歳にして初老と称するが、西洋では壮年時代として比べてもかれらは身体を養うことが
永久の誉とし、主義を建てることは一時の誉にして永久のものではない。
これは東洋人が体育を急にしたる策の結果であろうや、然るに日本が近年従属的に西洋文化を学びて
物質的に流れたるも古来の心の養育を行ってきた反動である。

身体を丈夫にし金を求めるは倫理人道の一成分である、金は人生を生きる上で必要の相関である。
（金は即ち Labor[働らき]の対価にして万能力を有する）
身体の重要なところは、そもそも人の身体は各自一つであり、人の私有専用すべきものです。
社会の生命は一つの条件をもって断絶するものではない。我身体は過去の生命を受け継いで、又、
未来の身体を造るべき中間媒体者として社会生命の一部分である。故に我が身を大切にするのは
国家・祖先・子孫の為に自覚すべきものである。
未来の国民は吾人等によって生ずるものである、況や身体は事業に密接の関係を有する。
身体弱くしてどうして将来優秀且つ不可欠な会社に必要な人材と成れようか。
要するに身体を重視すべき所為は第一に国家の為、第二に自分の事業の為である。

人の心意の作用には種々あるが、先ずは三つ考えられる、

①知力(Intellect)
②感性(Feeling)
③意志(Will)
である。

人間が動物以上の成分力を有すには人の如く思考であり、又人の行為は自覚力を有する。
自覚力とは自分で自らを熟知することである。
他の動物においては自己と云う観念がない、これは人と異なる点である。
又、(知力)について一層解剖研究すれば

知力(Intellect)
- 知覚(Perception)
- 記憶(Memory)
- 想像(Imagination)
- 思考(Thought)

（想像は全く夢より生ずるものではなく、必ず記憶がその基礎となって形成される）

尚も一歩進んでこれより**知力の各部である知覚・記憶・想像・思考**を一層深めて研究する。

●知覚（Perception）
- 外物知覚（External Perception）
- 人意知覚（Internal Perception） or 自覚、反省

知覚とは我々の感覚器官を以て物を知覚することを云い、自己･自らを知る、即ち反省に自覚の能力である。（現今、学術研究の結果、人体の皮膚には温点･痛点と称する一種の痛温感覚器があり、その他重量を計る神経又は筋肉に一種の感覚あるを以て五感と云うには語弊を生じこれを総称して感覚器官と云い、これらの如きは心理学につなぐ能力である。）

人間の幼稚の時代は感覚、他の動物の幼時に比べて確力が鈍なることである、即ち智識の薦達は後慢である、然れば人間は他の動物に劣るが如しと云うが、人間は知力は成長教育する能力があり他の動物にあっては初めより終わりに至るまで知力に大した薦達を欠ける、即ち彼らは成人薦達の能力を有さないのである。

例えば数珠の網を張りて繁栄すること、その巧妙実に驚くべきだが、未だ千百年の後一つの改良を試してもせず、然るに人間は太古モンゴル系の人種が営む家は洞窟、木造など数千年を経て今日に至っては堂々たる屋敷、高楼となっている、これ人知は進歩薦達の証を有す、他の動物はこれを欠く証である。

この薦達する勢力を可能性、若しくはこれを潜在力と称する、この力は刺激を外より加えれば加えるほど、これに応じて開発改良するものである。

故に吾人の智識は（物事に）経験に依って造られるものである。然れば皆さんは今日より感覚を充分に働かせて経験を積んで知識を増し充分敏健なるビジネスマンとなるには全ての事に充分なる投資を注ぐべきである。（Whole Attention を Pay すべきである）

●記憶（Memory）
- Memory as Retention （把住的記憶）
- Memory as Reproduction （再生的記憶）
- Memory as Recognition （再知的記憶）

記憶とは一旦感覚に感じ、脳裡にある引き出しを必要に応じて再び薦生し成るものである。

記憶は人智薦達の要素であることは勿論にしてこの力も他と等しく養生して薦達すべきものである。

今、それを説くに先んじて記憶を区分して説明すれば、記憶は上記の如く三者に分かれる。

・把住的記憶とは視る、聞く、等感覚を刺激したるものを殊実に記憶することを務めとし、自我の脳裡に残る記憶である。云わば記憶中の基本的なもの即ち記憶の First step である。

或人は知覚の如きものこれを有する、即ち習慣性となって残るものを云うのである。

この記憶力を養生するには先ず血液を清潔にし、脳を清浄にしていれば健全なる記憶を為し得る同時に身体の全部を健全に備えていれば記憶も健全永久に維持できる。要するに健全なる身体に無ければ健全なる記憶はできないのである。

把住的記憶を養う方法

①その事物に自分の興味（Interest）を有すること。

②充分にその事物を理解していること。

③如何なる事物も記憶しようと欲すれば自分の努力（Effort）を払うこと、
　然れば永久に記憶は残っているものである。

④自身平素の習慣に多少関係を有するもので記憶し易いもの。

・再生的記憶とはその必要に応じて把住的記憶を喚起し、事実を再現するための記憶である。
これの養生法は色々あるがその最も良い方法は先ずその事実の主幹、大意を或記号に由って
記憶することである。その符号とは言葉にしてその最も記憶に適当であり、覚え易きものを
撰ぶべきである。
（所謂、記憶術とはこの方法にして記号に依りて記憶するものなれど、その記号の覚え難き、
或いは易きはそれぞれ[境遇･時代も異なれば]人に依って異なれば一律の符号を以て
一般の人に適用するのは誤りで、即ちこの術の実践は大いに行って獲得すべきである。）

・再知的記憶とは把住的記憶、及び再生的記憶を喚起し、且つその記憶に関する詳細を関連付けて
察知し定める記憶力である。故に把住、再生の如く無意識にしても当記憶し得る自然的な力とは
一歩進みたるものなればこの力を養生することが必要である。
記憶は把住、再生迄では未だ確定されておらず、再知を使って初めて確定する。
以上三者を使って初めて完全なる記憶となる。故に三者共に養生すべきである。
記憶力養生の最も実用的効果のあるものは
①記憶を過度にしようと務めるべきではない。
記憶も脳力の度を越えて多く吸収しようとしても、遂に残らず、例え記憶できたとしても、
一時に止まるなり。
②記憶しようとする事を出来る限り理解して記憶するべきである。
③記憶するには必ず繰り返す事が容易いように練習を必要とする。

この方法によれば確固たる永久の記憶を得ることができる。
もし、この記憶力を養成する事をのみ務める時は必ず他の推理力等の援護となるように
記憶も他の能力と平行して養うべきである。

●想像力（Imagination）
想像力は一見記憶力に似ているが、その実は大いに異なるものである。記憶力とは過去において
（見聞）経験したる事物を再び脳裡に再生することであるが、想像力は過去において経験した事を
基礎材料として未経験の事を考える心意作用である。
言い換えると記憶は過去に関係し、想像は未来の事に関係する。
従来、或人の説に想像力は文学者、詩人等の専有物にして他の人には必要無いと軽視しているが、
大いなる誤りにして想像力は新しい工夫の基にして改良進歩はこれに由って成される。
万事進歩改良（Reformation）の必要であることは勿論のことである。
然ればその種因たる想像力は万般の事物に必要である。即ち何れの職を取る人にも欠けてはならない
ものである。この想像力は如何にして修得できるかと云うと固まった記憶力等よりは一歩進んだもの
なので修養するのは容易ではない。先ず日常出合う万般の事の大小を問わずこれを題として想像力を
研くべきである。即ちこの者は従来その様であっても今後はその様が如何にあっても習慣に盲従せず
これに対して一つの新工夫を試みるべきであり、要するに平素からの新工夫への心がけが必要である。
この想像力は前にも述べた如く決して軽視すべきものではない、記憶と平行して発達すべきものなり。
記憶力は保守的にして想像力は進歩的である。事において保守、進歩共に必要とされることであり、
決して一方に片寄らず調和して始めて完全な人物となるのである。

●思考力（Thought）

思考力とは物の道理を考え判別する力にして記憶力、想像力等は具体的即ち或一つの事実に
おいて考える力なれども、思考力は抽象的即ち大体において考え及ぼす力である。
人は到底、世に無数の事柄をいちいち記憶し切れるものではない。故にその大体において
思考しその更なるあらましを会得し定めるのである。それにはこの思考力に依るところである。
故に思考力の必要なるは別に説明を要する、実例を挙げれば人が記憶するにいちいち記憶する事は
無数となるので苦しい、或る Common name の本に或る事物を総括する等、その Common の物とは
言葉にすると言葉は即ち抽象的なものであり、故にこの思考力は成分に知力が在るのではないので
幼児には思考力はないが成長するに伴い他の知力と共に生じることになる。
思考力の重要な働きは三つ考えられる。

①：判断力（Judgment）にして物事を明瞭に判定し言葉に明白に言い表す事である。
人が心の内にある曖昧の考えを有し、これを速やかに言い表すは Judgment の能力である。
故に Judgment の欠乏したる人は言葉明瞭ならず。

②：物事を概括する力である。即ち種々の事物よりそれらに共通する点を採って総てを概括する
能力である。

③：推理の力である。これは事物の原理原則を考え出す能力である。
推理の方法に二種ある。一つは Induction（帰納法）他は Deduction（演繹法）である。
前者は種々の事物を研究してこれより一つの Common Rule を作り出し、後者は全体に共通する
効果的な一つの Rule を定め、それに由って個々の事物を推理することである。

智力の法則に三つある。

第一：各智力は何れも薦達成長する性質を有している。
第二：その薦達には一種の法則がある、その法則とは智力を適当に練習を重ねることである。
第三：薦達すれば自然に愉快な心がそれに伴うものである。

（　苦学談　及び　摘要　についての記述が面白く、興味をもったので冒頭に転記しました。　）

第二学期商業道徳筆記（明治 35 年 1 月）

情

●**恐怖**（Fear)は人間のみならず全て動物一般にこの感情を有す。しかし、人以外の即ち下等の動物は只、その害が目前明瞭に顕れたる恐怖心を感じるのみなれども、人はその智力に依って想像思考して未だその害の顕れない恐怖をも感じるのである。
世の中の人、往々恐怖を感じる人を以て小人薄弱等と称すれども人生に恐怖があるのは天然にして天性なり。
恐怖ある人は必ず小弱であることではない、但し恐怖にもその度有りて、度外に恐怖し、又は感じない者は天性に反する者である。必ず恐怖心は適度に見るべきである。

●**憤怒**（Angry）も動物一般に有する情性にしてこれらの怒りは他より来る害に属する一つの防御武器にして所謂人生天武の武器である。故にこれは防御的武器にして、決して攻撃的なものではない。
故に他人に向かって攻撃的に怒りを呈するはその本性に反するものである。
故に、怒りは防御的に用いるも決して攻撃的に用いるべきではない。
人はこの怒りなる情を一切有しない時はその人の権威や終始人に屈従して卑劣の人となってしまう。
故に必ずこの情も有してはならない、しかし、この情も事態に応じて適当に発するべきものにして決して何でもかんでも妄りに憤怒を呈する中はその人の品位を下するものである。

要するに恐怖の怒りに人生天武の性なればこれをその正法に由りて用いれば人の決して悪点にあらず、却って品位を高めるものである、然れば只、これが乱用を慎むことである。
以上の情の内にも消極的なものにして、進んで取るべきものではないが、人生にはまた、積極的に進んで快楽を求め感じるの性質をもっている。
即ち人には如何なる人にも義を愛し好む性質がある、また、諸種の学問上にもその探求するに従って趣味を生じ愉快を感じる、また、道徳に於いても道徳上の義務を果たす中は又、愉快を感じる。
なんじの進む方面に於いて人は愉快を求め快楽に生活すべき天然の性がある、然し愉楽を感じることも又、求める力に依よってこれを育生しなければ快楽を感じる情も薦達はしない。

欲

人には必ず欲念がある、即ち所有の欲（Mine）を云う、何者でも己がものとする欲情は先天的に人生に与えられたるものなれば決して欲は（私のもの）悪性のものではない。
公然、天武の性である。故に現今唱える社会党の如く万物共有平等等と云うことは人の天性に反することにして到底可能なことではない。　人生には学識の欲があり、即ち物の道理・原因を求めようと勤める欲がある。だからこそ現今の学問に進歩したのである。
又、人は名誉の欲を有する、これは如何なる人にも有る欲にして、又この欲心の無いものは駄目な人である。己に薦達を放棄する人である。
人は名誉心を以て卑財・悪欲であると称する者があれども、これは誤った者であって只その名誉心の為に眩惑に迷って不法の名誉を得ることが往々にしてある、以てこれを悪いことと称すれども正しき名誉心なるものは人生に欠けてはならないものである。
次に人には他に負けない、譲らないと云う欲念がある、これは即ち競争の基にして又この心が無ければ人は進歩することはない。故に人に負けたと云って争わないのは良くない。

以上の如く情について説明してきたが、分けると、第一は生活の為に、第二は愉快を求める為に、
第三は欲を満たさんが為に、を見極めることである。
只、以上の三者を適当に使用すればその道を成功するものである。
一言すれば情はこれを智力を以て制し導き、決して情のみを専らにするのではない。
情を専らにする中はその身のわざわいとなるのである、故に情を制し、尚、導けば益々これを養生して
その本性の善良なる働きを成せることである。
昔、我国の為の如く欲は絶つべしとは、只、それを制して利用することを求めずして、
その専らにして害を生ぜし事を怒るのである。然し文明の繰り返しでは欲も充分に薦達され、
その功罪をあきらかにし、充分にこれを一面には義理制導して専義なからしむべし。
Alternatively feeling（人間相互のもやもやっとした感情）は人間性固有のものなれば自然、或る時代
に至れば必ず薦するものにして、男女間の情、親子の情、及び親戚知人の情の如く一種言葉にできない
その感情は人間のみならず、全ての活動は有すれども人間と異なる処は、人のこの情は強固にして永久
のものである。動物が高等になるに従ってその子動物の幼動物が保育されて自ら独立するに至る間が
長きなり、故にその間に存在する情も従って強きなり。
その如き親子骨肉身の感情は自らの努力によるものではなく、自然に親兄弟を愛すると云う純愛的で
他の情より薦せるものである。
親兄弟及び親戚等の間に存在するのみならず、広く人間と全てのものに対して、互いに相手を愛するの
情である、これ即ち人情にして、この人情なるものの存在は社会を形成する要素にして、これが有って
始めて社会は円満になるものである。

ついに諸氏の他愛なる情の存在する理由に二説ある。

一説に曰く「全て人の他人を愛する即ち他愛心はこれと自身の名誉の為、利益の為になすものである」と。
全ての他愛は自愛より来ると唱えるものにして、これを利己主義又は自利主義と云う。
これは大なる誤りの見解にして人情の薦達の順序より云えば、先ず第一に自らを愛する情にしてこれは
自然に必要に応じて起こり来るものにして幼少の時代は（自愛）より他の情は未だ起こらないのである、
次に人生が少し薦達が進んで他、即ち自分以外の人も愛するの念が生じる、これ即ち他愛の情である。
続いて生じ来るは即ち広く人間として同類一般を愛するの情、即ち愛国、及び愛郷の情を薦顕するもの
である。故に利己主義者の唱える如く他愛は自愛より割り出されたものではない。
薦達の順序上自愛が只先に現れるのみにして他愛は後より薦達したると云う諸氏はこれ全く独立の
ものにして決して自愛心より生じたものではない。
現今、我国民の事情において或る事面は大いに進めども、他の事面において甚だ薦達していないものがある。即
ち両親、骨肉親族間の情は至って薦達すれども、社会一般の人類に対する愛情、即ち博愛心、
その公人或いは公徳（他の人々に対する徳）と称するものはいたって薄い。
これは現今、本講義にて宣教し公徳の等と称する者にしてこれを養成するのは一朝一夕の事ではない。
その根本である個人の他愛の情を先ず教育することである。
我国民の公共心、博愛心に乏しき所は思うに古来我国民は全てに被治、被制的な人民であって、以て
道徳等の点に至るまで皆目の未導により、只、儒教の忠孝等を歴史的に教えられたるものであって、
只、個人的な情を教育したのみである。
（自由を学ぶ国民は推測するに社会公共を教育し、いみじくも他人の権利を冒さないと同時に博愛の念をもって、
博愛心公徳等と称するものに富んでいるものである）

我国にて将来、これを守り、他愛的愛情即ち公徳心を薦達するには今日の青年たる者は良々この点に注意するべきである。

Alternatively feeling　（人間相互のもやもやっとした感情）
　Individual feeling　（個人的な感情）
　Fabric feeling　（集団的・構造的な感情）
Social feeling　（社会的な感情）・・・団体・国家に帰属する感情

人生は先天的に社交を好む性質を有し決して孤独にして生活を得るものではない。
故に必ず集合団体を成すものにしてその小は家族に始まり、次に同族、大にして同種族が相集まり生活する、しかし人は自然その団体→国家体制に帰属する感情を有するに至る。
各自の団体の幸福隆盛を願はないものはない。即ち人は皆その家の栄える事を思い、もって国の盛えることを願わないものはない。
即ちこれ愛郷・愛国の情である。人の情は概説の如く自分に関する情が第一に起こり、次に他（人）を愛する情が備わり、その後にその国家体制に関する情が備わるものである。
故に愛郷・愛国の情の無い者はその人の情は未だ完全に薦達しない者であって、その人は未だ完全の人と云うべきではないのである。
なお、愛郷愛国の情で国家体制を愛する又は念じる情は只、他の人々を愛する他愛とも異なり、国家体制一般に生じ関する事柄として、例えば風俗・習慣・言語及びその国体の思慮、即ち興論等に集まる観念である。即ち愛郷愛国等は吾人が日本と云う一国家体制の中に生まれ、その風俗・習慣・言語の中に育てられ、謂う所の日本魂なる国家体制的志操を呼吸して人となりたるものなれば、その故郷を愛するは勿論である。若しその如く社会国家体制に対する観念が無いものがあって、そのような国家体制は実に薄弱にして破壊し易きものである。その国家体制に属する各人の観念は？？その人の志操に対して勢力あるかはかの雑種人の国家的感情に乏しくして自然奮薦・高尚・自信等の全ての感情に冷遇薄弱にして従ってその人の意志が薄弱にならなくても、National feeling が人の全ての感情の基礎となるものであるかを知ることである。
然れば如何にしてこれを修養すべきかと云うに、
第一に、人が如何なる職業を採るにも教えに我一事の利害のみを思えずこれに関連して国家或いは国家体制なるものを教えの念頭に掲げるべきである。
第二に、人は出来得る限り自国内を旅行し、その状態を詳しく目撃することは自然愛国の情を薦するに至り、又、外国に行き諸般の事を見学する毎に自国のことを思い出し刺激を受けて我々自国を愛するの念が沸々と生じるのである、故に可能なら外国に行き見るべきである。
一方には見学を広くする利点大となるのである。
第三に、その国の歴史を常に念頭より去ることがないことである。しかも各人各自の家系を思って面々我一家への思いのように一国の歴史は即ち一家の系図の如きものであるから、故に自国の歴史を常に念頭に置いて他国の歴史を読むにも一々我国のものに比較し照らし合わせて視る事である。

要するに自国の現在を研究すると同時に過去も明らかにして、これを他国に照らし合わせて悠々我国の情勢を固めるべきである。

意志（Will）

意志なる語は現今度々用いる句であるが、その意義一定せず即ち英国流に訳せばその意味は狭くして「ひとの心意の作用」を云う、これを独自に解釈すればその意味は広く「動物の活動力」であると云うけれども心理学上に用いれば意味は狭き意味にして人の心意の活動を云う。

Will は人の Mind 中で最もよく薦生するものである。

Mind
- Interest ・・・（1）
- Feeling ・・・（2）
- Will ・・・（3）

人にして Will なきものは未だ完全なる人と云えない。

Will の働きを三つに分けると

Will
- Power of Choice （選択力）
- Power of determination （決断力）
- Power of Execution （実行力）

選択力（Power of Choice）

選択を要すべき異なる目的物があり、これらを選択するには或る情報に由って、又、智力を以て、比較思考してこれを選定する、選択は己の意志に従って自ら思うままに成し得るものである。

これ即ち人間意志の自由と云うものである。選択の特権である。これが人間の高尚なる所以である。

古来自由は肉体に存すると誤解し考えていたが、肉体は物質の法則に従うものにして、自由の意志に存する。

決断力（Power of determination）

選択に由って得たる事を持続する力である。故に元の選択にあたって注意し確実なものを択び定めれば不利を見ても決心を揺るがすことはないのである。常に確固たる決断の無い者は遂に成功は定まらない、決断力は最も成功に必要なものにしてこれを鍛錬するには如何なることも一旦企画すれば、必ず、成功するように習慣を付けることである。その為に成せる事は困難があっても貫徹することである。決断を中途に揺るがすのはその事の成功はならず、総じて決断力を弱める習慣を生じてしまうなり。

実行力（Power of Execution）

これは最も智力を要し How（如何にして為すか）to do　を意志力により判定するものである。

物事を成功するには最も簡単なる方法を取り、あえて困難な方法を取ることはない。

Will

これは最も大切なるものにしてその薦達を務めるべきである。然して一方には智力を薦達しこれを導くことである。妄りに Will に陥るときは視野の頑なな頑固者となるのである。

人は感情を強くし、欲を強くし、これを意志にて制し導きその意志は智力に依って正しい道に導けば人道の要を得ることができるのである。

以上は人の心意の組織について論じてきたが、次に行為について述べる。

人の行為は欲・情・意の三者の発動について更に詳しく説明をすれば、Action は元の情によって薦起し
智力によって、その利害得失を思考しこれを意志によって行為とするものである。
人以前の動物にあってはAction は只、情によって発するまま欲の力に習って、思考することが無い為
に目前の欲に従って動作するものである。
人の行為は只、その行為の目的を達成するのみならず、その行為の習慣を生ずるものなれば、大いに
慎まれるものである。
又、人は生来協同生活即ち社会の一分子なればその行為は只、我一身に係るのみではなく、自分より
他のものは、その社会一般に並行して影響するものである。
これ即ち人が責任を有すると云うことである。
人は他の動物と異なる点は社交的なることにして、各人は必ず孤独生活を成し得るものではない。
而してその社会なる語は今日、よく耳にする語なれども果たして如何なるものを云うのかと云うに
只、人類の集合生活を以て直ちに社会というのではない。
その民衆の間に一つの共通の精神、即ち、Social mind なるものが存在し、人はその中に生まれ成育し
その一部分となり、形成するものを社会と云い、人の群集したるものは公衆 Public に過ぎず、
次に厳密にはこれが定義を下せば、曰く、「社会とは利害得失を具体化する人類集合生活しその間の
自ら一種共通の感情・目的・習慣等を生じ益々ｓの団結をして強固にするものを指して社会と云う」。
その共通の精神とは即ち一家においては家風、一校においては校風、国にして国粋等を云う。
而してこの共通精神はその団結することの長所短所により強弱がある。
その社会は一つの精神を有するを以て現今学者が社会を以て一つの Organic body と見なすが如くなり。
由って社会の組織は甚だ人間に似たるものである。又、人生は社会に生まれて、その中に成育し、
その一部分を成す。故に人と社会との関係は一つの機械、例えば時計とその局部の機械・歯車
又は針の如し、その局部機械が相合わせて動作すること、人の各行動があって社会が活動すると云う。
この説は今日は余り行われていない、何故なら、歯車・針等の局部機械の結合により、分離して生存し
得たるも、人は社会なるものより離れて一分間も生活することはできない。又、一部の機械は他に破損
があっても、自分にその害の及び来ることはない。しかし、人は他人の痛みも我が身に影響を及ぼし、
苦痛を感じる、勿論、一人の不利は社会全般に関しては、金属も有機体（Organic）に属する、
その各部分の如し、一部の痛みは将来全体に及ぶ。

故に人の貧富強弱は一国社会の貧富強弱である。即ち、一人の行為は社会の行為である。
人生は絶対的で独立なることは能はざるなり、独立して事業を成すと唱しても、只、社会の勢力を良く利用したと云うことである。
人は生来同一なるものにあらず、必ず各人個々に異なるものにして、従って、その社会における位置即ち天職なるものは各々異なるものなれば、各人は各自己の天性に依ってその業を撰ぶべきである。
人は同等なりとの説は今日の己に陳腐に属す、学理上、生理上、各人は異なるのである。

従来の講話を概言すれば、
第一：人は必ず肉体を離れられないものであるから、古来の道徳の如く、肉体を軽視するが如き傾向がある、今後の道徳養生には必ず肉体の養生も計画するべきである。要するに、修養には肉体に大いなる関係があるものにして、切り離すものではない。
第二：人が他の動物と異なる所は、他の動物より異なる精神を有するものであるから。
第三：人は社交的動物にして社会に生活する者である事を論ずる。
人は以上の三点を忘れずその三者を等しく薦達するべきである。然るに肉身のみを愛し、謂う所の、肉体的欲の奴となれば、妄りに情心の修養のみを事とし空想的な人と成ってしまう。
或いは社会的な生活のみを云うものである。その如く或る一方に偏らないように注意すべきである。

今より理想について論じるに、先ず、理想は以上の三者に基づき価値を付けることが必要である。
理想なるものは全て身体・精心・社会等に対して適当であるべきである。
理想はその人の年齢又は時勢に伴って多少は変遷するものなれば以上の三者に由ってその大部分を定めれば根本的に変動を要することはない。
しかしながら、貫徹する理想が無かったならば終始変動して一定の主義理想を有しない者となる。
故にその初め確固たる理想を抱きその目的は不滅のものにはならないのである。
決して外界より更なる多少の刺激の為に変動するように、薄弱なものになるのである。
その理想は昇近にしてその目的を達すれば直ちにこれに安んじその薦達は止まり終わる、
心身共に収縮後退することになる、さればその進むに従い理想は益々高尚となる如きものにならない。

人は必ず大なり小なり何らかの目的無くして生存する者はない。
その目的とするところは各人に由り異なると云えどもこれを競うのは愉快・快楽を広げるが為である。
ここにおいて、人は自己の快楽を求め達するを以て目的とする、即ち利己自利主義を以てこの世の正道なるか否かの問題が起きるのである。又、他の人は自分のみならず家族、他人より国家社会等全て自己の力に及び限り広く人類の幸福快楽を求めるを目的とする、即ち功利主義なるものである。
この功利主義（Utilitarianism）は前の利己主義（Egoistic hedonism）に比べ、一歩進んだ説である。
Utilitarianism は加藤弘之、Egoistic hedonism は福沢諭吉、日本従来の良心説にして、万事、人の良心の決断に由るのである。その極端なものは即ち欲情を制するを以て定めとせず、尚も進んで、全く欲を絶つべしと云って禁欲主義であり、これより一歩戻して制欲主義がある。
その他完全説等と云い全ての人は完全なるものにのが人の道なりと云うが如く、以上種々の説があるが、未だ直ぐに採用して現今の主義とすべきものはない。
その時勢に従って改良し適当なるものを択ぶべきである。

利己主義（Egoism）自利説を目的標準とする為には定義の如く自己を利し求めるにある。
人は種々の行為をして、又、色々なものを求めると云っても、結局、自分の快楽を求めることであり、
即ち名誉、財産或いは権力は皆、それを以て自らを満足・愉快とする為である。
故に利己主義者と云っても絶対的に人の為にすると云うのではなく、即ち外見上は他人の為に行った
行為もその裏側には必ず我が名誉・利益を目的として成したるものである。
要するに人間万事の行為は自身を愛しその快楽を成さんが為なりと、これを利己主義と云う。
而してこの利己主義は正しいものか、自利説は完全なるものか否かを問われている。

人は如何なるものと云っても快楽を欲しくないものはない。
然れば人がその快楽を追求するのは性である。と云っても人間の為す事、万事自己一個人の快楽を
求めるものとするのは果たして当か否か、又、欲情なるものが有ればこそ、人間は発達し、社会は進歩
するものである。故に自欲を発し快楽を求めるも可である。
しかし、自己の快楽を求める為には全て如何なる事情があっても衝突を生じても叶わないものもあるか
否かは問題として研究すべきである。

中島力造先生の所説に由れば、利己主義なるものは全く根本的に誤ったものである。

その基礎は自己の快楽を求め自分の欲情を満たすと云うことである。
偽善で他の為に為すことがあると云っても、その奥心には必ず自身の名誉・利益の為にして、
他愛事業も一種の利己主義の習慣の如し、これに由って問題となるのは人生は生来、自分一偏のもので
あるか否か、一片の愛に他心無きや否やにしてこれは事実上の問題となるのである。
然るに人の情は組織上、自分の利害に関わらず他を思うの同情の念が有るものなり、
例えば親子の情の如き決して自分だけの為、我が身の為に互いに愛すると云うが如き、
自然的な考えにより来るものではなく、本能的に互いに我を忘れて愛するものである。
人間のみならず、他の動物とも決して自利心のみならず鳩が我が子の為には煙中に飛入るが如きである。
故に事実上動物には他愛心もあって自利一偏のものではないことは明らかである。
由って、その点に於いて先ず自利説は誤っているのである。
次に、果たして利益なるものに判然と自分のもの、他人のものと区別が出来るか？
我が為とする、あるいは他人の為として他の為として成したことが、自分の利益となることがある。
決して利益快楽は分量的なものではなくて甲が願えれば乙は全て満たすこと能はざるものと云う如き
物質的なものにあらず、甲の利は、乙の利となり、乙の楽は甲の楽しともなるのである。
人、共通のものにして即ち一家族の幸福、一国の幸福、大きくは社会の幸福の如く一般共通の快楽あり。
故に、自利説の自己、一個人のみの快楽となす如きは偏狭の見解である、又、利己主義を唱える人が
云うに「人は幼稚の時代には利己のみを知れども成長するに従って、新たに他を愛するにことよって
自利が根本にしてこれより他愛は生じるものなりと、然しこれも又、誤解にして、そもそも幼稚の時代
には利己の外に必要なければなれども、その成長に従い、必要に従って他を愛する心の生じるもの
にして利己より別に生じたりと云うべきものではない。

これら種々の点よりその説の完全正当なるものではない事を論ずるを
第一：心理学上の真理と考え、第二：快楽を分量的に誤って考え、第三：自利を主義とする
連中は生来人は欲情限りなきものなれば、到底、自利を以て己が欲情を達成することは出来ず、
故に、不平圧制となるのである。
不平は只に不快になるのみならず、その不平の為に心を奪われ、事業成功に心を用いることができない、
当然に事業に成功できないことになるのである。
故に人はもしも、快楽、幸福を満たしたいとすれば、先ず、快楽幸福を意志とするべきである。
幸福を常に求めても勝手にやって来ることはない、求めないで愛に為すことは美である。
又、品性も妄りに幸福を追求する時は卑賤となってしまう。
幸福を敢えて求めんとしなければ、その品性高尚となるのである。
職業は自己の幸福を為すことと思わず、天職と思って為すべきである。

公衆的快楽説（Universal Hedonism）と所謂**功利説**（Utilitarianism）にしてその主意を一言で云えば
”人間は全て最大数の人の最も大なる快楽を求める事に勉めるべきである”と云うのである。
（勿論、その最大数と云う中に自己も含められるのである）
その説は十二世紀の頃、英国にて唱えられ、以来学者間は勿論、一般の人に信じられている。
日本にては陸奥（宗光）伯爵の「利学正宗」は Bentham の著書を翻訳したものにして、
又、西條氏は「功利正宗」を Mill の著書より翻訳したものを以て、考え方は一時期、思想学者間にも
論議が行われた。現今も、尚、それらの説を唱えるものは少なくない。
（その他、翻訳書はいろいろあって功利説に類するものである）

その説は只の学説として唱え導きたるのみならず、これらは大いに社会の薦達に助けとなること少なくないが、
今日の英国学者間にはこの説もまた陳腐化し、放棄されてしまった。
何故成れば下記の如くである。この説の完全にして皆さんの将来、採用すべきか否かは問題である。
その説が曰く、
第一：人は皆、如何なる人と云えども快楽を喜ばない者は無い。
全て人の行為は快楽を求めるが為である。
故に一時の苦しみと云えども未来の快楽の希望の為には苦しみとはならない。
第二：人の快楽は複雑なものにして第一の強弱の度合いであり、
或る者には快楽は非常に重大なれども或る者には快楽とはならないことがある。
然ればより重要なものを争って求むるべきものとなる。
又、快楽には Pretty の度合いがあり、おそらく全く純粋な快楽なるものではなく、
必ずそれに伴なう苦痛がある、故に快楽の成分無きものを撰んではならない。
第三：Continuous 連続性の長短において、快楽に由って或る者は久しく快にして、他は一時の快なれば
必ず前者（連続性の久しい快）を取るべきである。
第四：未来の快楽の確かさにして、将来快楽の生ずる事があっても確かなるやを Probability（見込み）・・
将来快楽の来る時間の長短にして、その快楽を向かえるまでの短きものは耐えるべきである。
第五：Productive Power 快楽の生産力にして快楽に由って長じた事に関してのみ生ずる快楽と、
一つの快楽が基本となって他の快楽をも派生するが如き快楽があり、
然る時は勿論生産力を有する快楽を求めるべきである。

以上の如く複雑なれば全ての点に鑑定して採用するべきである。
これを験して曰く、
第一：人は勿論快楽を好む動物である。然るに、人生の終局の目的は快楽を得るにあるが、
その以前には一つも求めるもの無きか否かは問題となる。
人に憤りあれば、愉快を求めんとするは当然である。
然し人の心は憤りのみではなくその他の意志がある。
意志は活動を生む故に活動してその結果或いは快楽を得る事あり、
然し全ての快楽たるや憤りの為に得たるものに非ずして活動の結果である。
第二：人は事実上に於いては快楽を求め、ある疑もなければ為が故に、
人の為又は自らの為に快楽を求めるべきかを質問すれば、その答弁に躊躇するものである。
第三：それを説く人は容易に快楽なるものは測定・計度なるのものをいろいろと考えるが、果たして、
それを計量する単位が存在するのか否かにして、ものを計量する単位はないのである。
然るに快楽なるものは各個人の性質・境遇などによって、必ず一定するのもではない。
各人個々に異なれば、比較することも出来ない。
然れば君達にして、最多数の人の最大快楽なるものを測定して為すべきか？　到底不可能である。
一歩譲って測定出来たとしても快楽は一つの種類ではなく、いろいろの種類があり、
ひとつの器でもって測定できるはずもなく、分量や種類からも到底計量できるものではない。
尚一歩譲って、為し得るものとする人がその測定の為に終日打開策があることを求めようとするのは、尚も品性を持たず、品格を保ちたがると云うのは問題である。

前に述べたいろいろな快楽は求めようとして得られるものではなく、人の行為は天職義務を器と考えて、
名誉や快楽は目的としてはならないのである。

快楽説はよくよく論じて来たが、不完全なもので、古来の禁欲道探求に比べれば、大いに進歩したものである。
然も未だ充分なものとして君たちの耐えるべきものではない。

この説の少し進歩したるものは Spenser 氏の進化的快楽説である。

進化的快楽説は Spenser 氏の所説にして
人が世界に為せるには単に自己の快楽を得るを以て目的とするものではなく、又、公衆的快楽説の如く最多なる人に最大なる快楽を与えると云うが如き事実の無い、或いは事実の難しい説ではなく、
先ず人生の目的を二分し、一つは快楽は直接に求めようとしても、かえって、求められないものであるから、その快楽の個々に生ずる所の根源である条件を追求するべきである。
即ち身体の健康及び知識を得る事でこれらは自然に快楽を生じ来るものにして、
（人生の目的は）　第一は直接的に求めるものはその条件とする。
第二は個々を間接的に生ずる快楽を取得することである。
これを進化的快楽説と云う。
要するに人が人生の目的を二分して必要となる条件を求め行うか、
人生の目的の必要条件を果たして快楽を得れば人は自然に薦達するものであって、
その薦達とは Spenser 氏が云うに「生命を長く保ち、広く自由の生活を成し得たる者である」

今、この説を評すると、前の快楽説とは進歩したものと云える。
即ち、個人的快楽説は多少個々の内容が違っても、この説は必要条件を見出せば、結果として心身を豊かに保ち、自ら社会進歩に有益である、又、公衆的快楽説の如く漠然としたものではなく、故にこれを以て真理に近きものと云える。

然しこれを以て完全のものとし皆さんが満足するべきではない。

これも又、快楽を求めると云うことであり、然るに前にも求めるが如く、人の行為の心なるものは、
只、情のみではない。志しがあって、道があって、その三者が合してその全体を作るものである。
快楽はその一部分の感情を満たすのみであれば、未だ快楽を得たとして人生の最終の目的を達したりとせず、人は必ずその活動を欲しない者はない。その根底にはこの説も未だ強固なものではないのだから。

全ての快楽論者は人生の快楽なるものは外的な事情・物より来るものであるが如く考えてはいけない。
決して(人生の)快楽は外部のみより来るものではなく、元来快楽なるものを分解して二つの部分より
成っている、即ち、第一はその外部より来る物、第二は内部に存在する物にして、各人自ら心裏に於いて快楽を薦生することである。
悪業を以て一時の快を得たりと云っても、その快は一時的外部の快にして、その心中にある成分の
良心に責痛の感があるものである。

故に真の快楽なるものは外側の状態と内なる心の安楽と合わせて始めて得られるものである。

故に快楽説を以て、未だ人生の目的を解釈し足るものとするものではない。
これより進んでその真の目的を求め、解釈するべきである。

第三学期講義

克己説

理想の設定には古来より二種あって、一つは情によって快楽を求めるを主義とし、他はこれに反して
情を制して欲をつつしむことを務める主義である。即ち非快楽説、即ち克己説である。
儒教は非快楽説に近きを以て日本の道徳は快楽のその感化によって、
克己とか絶欲とか云う非快楽主義である。
快楽説は主に情を基準としてつくられたが、克己へ知識の倫理論によって主となって、
情を最後とするものである。
克己論中にも又、二種に分かれる、一つは極端論者にして即ち禁欲説である。次に制欲説である。

禁欲説（Asceticism）

現今文明の社会においては己をつつしみ、物に廃し、信じるもの殆ど無しと云へども、何れの宗教も
総じて多少のこの傾向を含有している。この説は快楽を以て罪とみる、まったく Feeling より絶つべきを理想
とし、情欲を満たさんとするのは極卑賊の業であるもみならず、遇の甚だしきものなり。
人の欲なるものは限りなきものにして、到底これを満たすことは不可能なものである。
よって、その終局を看破するのは、謂う所の、悟りを開くものにして、自然と心の中に平安・安楽を
得て、独立超然の位置にあって決して外界の状態に左右されない。
これによって始めて平安の人となることを理想と考えた説である。
然し、人は果たして一切情欲から離れるべきものなのか、また、離れ得るものなのかは問題である。
果たしてこの説の如く人の欲を絶った状態では事業は一つも薦達せず、自然滅亡を免れない。
理論よりすると互説はただ智のみを主として情の人の心中にあることを忘れた論である。
智・情・意は元来人心固有のものにして必ず並行して進めるものであるが、只、一部の智・或いは
情のみを薦達しようとする快楽説の如きをもって完全のものと云うことは出来ない。
又、真にこの説を実行する上にも更なる困難があり、即ちこの説を実行するに於いては今日の社交
なるものを全く絶ってしまうことになる。これは人が社交的動物である本性に逆らうものである。
然れば、そのような不完全な説は到底採るべきではない。

制欲主義

前説に比べれば一歩進歩して、平穏なる説である。即ち欲を制し、これを整理して行う説である。
故に実際に近いが果たしてこれを以って充分であるものとは云えない。
抑えて何の為に制欲は必要となるかを目的にしておらず、情などにその理由を求めて、
これを行うべきではない。
制欲は要するに消極的道徳である。皆さんは消極のみを得て、満足すべきものでは決してない。
必ず進んで積極的なものを求めるべきである。
そのような消極的道徳を行って、積極的なものを行うことはない。
今日、日本では不幸にして慈善事業は起こらず、皆、その原因は信用の不足に由るものにして、
この不信用は以上の如き消極的道徳が行われてきた結果である。
依って、将来的に人の理想は智・情・意の三者から割り出し、偏らないものにすべきである。

以上の諸説は各々或る真理（決して完全なるものではないが）の上にその基礎を従えているものであるから、全く不当のものではないので、これ等の考えを採りいれて現今の理想主義とするべきである。
想うに、これ等の各々を総合して一つの完全なる理想主義を得るべきである。
古来の道徳なるものは、その社会が未だ単純であると共に或る一部についてのみ説いたものなれば、
これを今日の多方面の社会に適用することは出来ない。
因って今日の学問上からの道徳は基礎を人格と云う位置に置くことである。
言い換えれば、人格（Personality）なるものは如何なるものなりや？と云うに、
第一、精神のみならず、肉体も人格の一要素である、従来の道徳にては人格は全く道徳なるものに何等の関係もないが如く思考したる、この旧思想を脱して如何なる人も身体があって存在するものである。従って、身体の健全なる事は人格に欠くことは出来ないものである。
第二、如何に肉体の強壮完全なる人と云えどもその精神は完全ではないので、これも又人格が在るとは云えない。
第三、人は国家的・社会的に生活をなすものにして国家社会を離れて人格があることはない。
由って人格なるものは要するに身体・精神・社会・親進の四要素が完備して始めて成立する。
故に、皆さんの理想もこの四点を設定して建てるべきである。
古来の如き偏った不完全のものを以って足ると考えてはならない。

人生の理想を一言で云えば、「人格の実現である」
今、「実現」という語に付け加えて説明すると、
英語では Realization と云い、或る物が隠存して、未だ外に表れず、
未薦達の位置にあるものを薦育の助けを受けて徐々に薦現することにある。

人格の薦現とは人がこの社会に生をうけて国家･社会･人類の為に尽くすことにあり、
人命は皆、これを国家・社会・人類より受け継がれる。
（即ち、人は外界の刺激に由って薦育するのである）
然れば、社会・国家に尽くすことは人の恩義・縁である。
由って人が生まれて国家的・社会的な生活をするのは人格を完成するものである。
されば、国家人類に尽くすと云う事を以って理想とする時は大きな誤りはない。

しかし、これのみにては未だ狭益にして、近親者から皆さん各個人には進む道を薦めるでしょう、
次に自身が起業する義務、即ち独立自尊を守るには己の修養を以って肝要とし、
次にこの守りを完成するには肉体の健全を大切にすることである。
以上のこの点を目的とすれば人生の目的・理想に到達するものである。

要するに、人格と云うものは、只、一方面より見てはならない。
諸方面より観察して人格を Realize することである。

推察するに、「**人格の実現**（Realization of Personality）」が現今、もっとも優れた理想論である。

権利と義務（Right & Duties）
Duty と云う語は Due　即ち Debt の意義にして、人は皆、或る目的を有し、その目的に達する為に
人が有する責任のことである。
これは法秩上には義務と云い、道徳上にては本務と云う。
謂う所の、義務なる語は他より強制されることで、本意に反して責務を果たすことである。
Obligation の意味を含むもので、故に道徳にては我が目的を達する為の理想に接近する為に行うべき事は必ず
為すべきである。故に通俗の語弊を避ける為に本務と称する。

今、仮に甲乙二人がいて、各々が個別的志望を有し、甲は自己の目的に達しない途中に於いては
これの障害を為すべきではない、同様に乙は自己への害を防ぐと同時に決して他の（甲の）前途を
防いではならない。
害を防ぐことを欠くことは、直ちにこれを弾劾・罵倒される、これをもって権利と云う。
故に人格が備わる者は必ず、権利と義務をもっているものである。

１：生命を害しない義務、これに対して生命を害されない権利がある。
２：自由活動を妨げない義務に対しては妨げられない権利がある。
３：人は物を所有する権利があって、他の所有物を冒してはならない義務がある。
４：名誉信用を尊重する権利がある。これに対して他の名誉信用を害してはならない義務がある。

以上の権利義務は人格に天から廻って来るものであるから、人生の前程とすることは出来ない。
然るに、個人以上の国体・国家社会の権利は個人の権利を処置することができる権利でもある。
人格を備わる者は必ず権利義務を有する、道徳はこれを守り人生の本務を為すことが目的である。
一種特別のものではなく、人はこの世に存在する限り、何時と云えども道徳を分離する事は出来ない。

本務の本質（Nature of Duty）
人生、命をうけて、必ず我が務めるべき事があるのは、自ら信じることの為であって、
漠然としてこの世に生じたものではない、即ち、その務めとは或る事は為すべき事であり、
又、或る事は為してはならない事であって、これは人が自己を制するに正しければ必ず自己の責任を
制するものにして、これ即ち、本務の義務にして古代はその如き学術上の言葉はないが、皆その人が
感知する行為である。
而して、その為すべき事、又、為すべきでない事、本務の義務なるものはその社会及び境遇が異なる事によって
異なるものである。
而して、これ等の本務の義務なるものは人の空想や迷想ではなく、実践上、人が本務を持つ事を信じることであ
り、故にこれが本務である。これ一つの Fact（事実）である。
本務の性質は二つより構成されると云われている。　絶対性（Absoluteness）と普通性である。

絶対性とは人が自己の感情の好むか、否かに関わらず務めなければならないものを云う。
固より絶対性と云っても必ず人に本務があると云っても必ず同一ではない。
時と場合によって異なるのは当然である。然るにこれを誤解して絶対性とは古今東西、同一であると
云う者があるが、絶対とは、只、務めなければならないと云う意味である。

普通性とは
人は決して本務以上の事を為すのではなく、又、為さないのも可なのである。
本務とはその人の為すことの出来る限りが本務の極点である。
言い換えれば人の及ぶ限り為すのが本務である。
或る人は「政治は我が本務なり」と云うが、その結果、又、他に及ぼす影響如何を観る事なく、只、
追行すれば本務が果たせると思う者は大きな誤解である。

本務の区別
先ず、二つに分けられる。
一を確定の本務（Determinate Duty）と云い、他を不確定の本務（Indeterminate Duty）と称する。
借債があれば、返済するのは確定の本務である。
又、仮に貧窮民がいて、これを救助しようとするのは各人の勝手にして、これを不確定の義務と称する。
今日の倫理学上決して不確定の義務、即ち為すも為さざるも勝手事であると云うが如き Loose の務め
なるものはない、本務は一つにして必ず務めるべきものである。

本務の区別について、上のように区別をしたのは、前者の場合においては如何にして本務を果たし得るべきかを
判断し、普遍の定義によって定められることを意味している。
後者はその本務を果たす方法の複雑・困難にして充分な思慮を要するものにして、一見、手段不明
なるが為、本務を果たすと否かとは勝手であるなどと勝手な事を云うのである。
要するに Determinate Duty とは本務を果たす方法手段の確定したものである。
Indeterminate Duty とはこれに反して、方法手段の不確定なものを云う。

又、以上の区別と殆ど同意義にて Perfect と Imperfect との二つに区分するものがある。
又、本務を積極・消極と区分するものがある。
これもまた、便利であると云えども、よくよく誤解される場合がある。
積極とは為すべきことを為すことで、消極とは為すべきでないことを為さないことである。

人知の進むに従って、人の務めるべき事の繁雑となる事は自然の道理にして従ってこれが区別を要す。
従来これを区分したり、今これよりこれ等の各々に続き研究をする。
これは人の倫理薦達の状態を知ることである。
第一は自己に対する務め。　第二は他人に対する務め。　第三は国体に対する務めである。

- Duty 務め
  - Individual 個々
    - 1:Self 自己
    - 2:Others 他の人
    - 3:Public 公衆
  - Social 社会的
    - 1:Sociaty 社会
    - 2:State 国家
    - 3:Humanity 人類

自己に対する務めとは前にも述べてきたように身体の健康を計り、修養を為す等にして、
次の（Other）他に対する務めとは、
この考えは我が国家及び中国古代学の儒教国の考え方に対して唱えられるものである。
古来は何事も他人を以って主体とし、次に自己を考えるが如く、自己を客体とした考えであった。

然るに世界の進歩と共に自己及び公衆に対する務めがある事を唱え、導くに至った。

次に人は動植物に対する義務が有るか否かについて、或る学者は権利・義務とは人格の間に存在する
ものであり、これ等に対しては全々務めは無いと云う。
人が家畜を飼育し食材を作るのは皆、自己の成したることと云えども、これ等の動植物にも幾分の感情がある。
生物なるを以って幾分の務めを為すかは人格の本務であるべきだ。

又、人は人以上の国家体制又は神仏に対して務めが有るか否かは宗教・道徳の問題である。
或る学者は権利･義務は人格の間に存在するものなれば、人以外のものには一切無しと云う。

又、他は全く反対にして人の務めは皆人が神に対する務めであると云う者がある。
これは宗教家である。要するに前者の分かれるところは神の存在を認めるか否かにある。

これを認めない者は前説を採り、これに反して神の存在を認め、神は或る部において人と意を通じるものである
と信じる。即ち宗教家がこの説を採るのである。
後者は個人の信仰に基づくものなれば、即ちこれを他一般の人に強制する力はないのである。
然るに古代宗教を以って治めたる時代は人の務めは神に対する務めであると云うのである。

然るに今は人知薦達し学理の進歩した時代においては学理の上に倫理の基礎を建てるを以って
何人もその理に反することはできない。
信仰によるものはこれを以って他を強制する力はないのである。
要するに人は皆目的（理想）を有し、それに接近する事を勤めることが人道である。
その道を進むことが自己・他人・国家体制等に対する義務の基となるものである。

本務の軽重
義務にも軽重があって、決して同一・一様ではないので、大なる務めを採って、小なるものは後にする
のは当然なりと云えども、人の務めには勿論比較的軽重があると云えども、決して絶対的なものではなく、各人
の地位・境遇と時と場合によって大小軽重を生じるものである。

以上。

予科商業道徳最後の講義

（中島力造先生一時間の講演、国家社会の為に成功のヒントが有ることを自覚する、
即ち、これを聞いた皆さんの成功には重要なポイントとなる）

修得の工夫（善良なる習慣をつける方法）
人の Mind は習慣を生じ易き様にするものなれば、勉めて善良の習慣を附ける様に携さえるべきである。
人は各々その性質、形体において異なり決して人は同一のものに非である。
それは無数の木の葉の中で全く同一のもの無きが如し。
然れば善良の習慣をつけるにも決して同一の方法、一定の規則で全ての人に附することはできないのは
勿論のことである。
由って各人皆その霊長、特典とする更に向かって悠々善良なる慣習を付けその点を以て他日社会に出て
社会･体制の一局の機関のことだけではない、万物は進歩するに従って分業制度益々必要となる、
故に君達は今日より自ら、自己を知って、果たして何れが長所なのかを定め、その特点なれば世界の人
として後世に評価される点を見定め善しを以て社会に出て一方の将となるべきである、
只、能力はあっても、何れの点にも一層独特の点がない者は云うところの平凡の人物にて決して社会に
重要な人にはなれない、故に君達は今日よりその点を知って益々その方向に進むべし。

準備を怠らぬように、学校に於いては、只、学科を修めるのみではなく、傍ら品性を高尚にし、
他日成功の準備、即ち自らの将来の目的に必要となるものを得ることに教えを活かせて欲しい。
人が長所とするところは、即ち天職の存するところである、故に妄りに他の方向に行こうと勉めるのも
勿論進歩延々にして或いは早晩これの道に回るものにして、その時は全く甚だにして他人に後れるの
ところがあれば、その初めを獲ることが大切である。

成業の準備、即ち修養には二つの方法がある。一つは積極的にして、他は消極的である。
積極的とは前に述べたように自身が長所とするところを、将来必要とする習慣を生じるところにあり、
消極的とは将来の成業に不整合となり、妨げとなる悪しき習慣を今日より矯正する心がけが必要です。
要するに先ず自己を知ってその欠点を補い、長所は益々薦達せしむることである。

前に述べてきたように、人は精神の器、又身体それぞれ相関すると、同時にその境遇・位置が異なる、
由って人はその地位を顧みてそれ相当の事をするべきである。みだらに妄想に採りつかれるのは良作ではない。
ただし、志しは尚も遠大であるべきであるが、身分相応が大切である。
君達は平凡で善人になることのみにして将来社会の必要に応ずることを目指し、
或る特色を有する善人となることが求められている。

君達、青年者が在人の伝記その他を好むものではあるが、これらは善良の事ではあるが、読む際に
注意すべきは在人の行いたる事をそのままその通りの事をしても、往々にして不整合を生じる事、
それは在人の時代・境遇を考えずして、只、その行為を学ぶは誤りである。
故に、在人の精神は採るべきでもその行為を直ちに応用するべきではない。
人の薦達には二つの方面があり、一方は実用的となる部分と他は原則的で高尚にして謂うところの
理想的な部分である、人はその両者の結合を欠いて一方に偏り易きものである。

依って品性を高尚にするとか云う無形の方面に精神を用いる人は空想的な人物となり易くして、
実際に一面が暗い不用の人物である。実用的とは只、直上の俗事に奔走するのみにて精神的に修養時のことである。全々俗人となる傾向にある、特に吾人高人においては俗化し易ければ大いに注意すべきである。人は善を好むと同時に悪を嫌い排斥する習慣が必要である。人にはお互いの人権を侵害し威すが如き、実は臆した馬鹿人である。そのような人に成ってはならない。
善は激実すると同時に悪は充分激烈に排斥しなくてはならない。
曖昧の人物となるのではなく、明瞭なる人と成るべきである。
私の授業で最も必修すべきポイントである。

まとめ

何が果たして自己にとって重大なるかを識別するは又容易のことにではないが、
その際は愚かな考えで家人の怒りを受けるにあらず。自己の裁量のみで決めるべきではない。
要するに自己の本務は絶対的のものにあらず、相対的なものである。
しかるに昔より自己の本務の衝突なる事とは、一人には必ず一つの備わった器に一つの務があるのみ。
所謂衝突とは何が大小軽重を判別するに困難なる場合のみ。初めて倫理学の適用を考えるべき。
倫理学問の効果はある究極の際にきわめて顕著となるものである。（平素の場合にはそれにあらず。）

謙祐

写真左は謙祐と家族(妻：津祢と静香)
【大正８年～９年(1919～1920)頃か？】

写真右は謙祐と家族(静香と筆者の父)
【昭和元年～昭和２年(1926～1927)頃か？】

あとがき

（予科商業道徳最後の講義）　中島力造先生一時間の講演

社会に出て成功のヒントと成ると信じる、これを聞いた皆さんの成功には重要なポイントとなるはずです。

倫理学の示す「人生の理想とは？」を一言で言うと「人格の実現（Realization of Personality）」にある･･･このことは講義を通じて分類し、解説してきたとおりです。

※それでは、各自における倫理修得の工夫（善良なる習慣をつける方法）**とはどのようにすべきなのでしょう。**

人の Mind（遺志・心構え）というものは生活習慣に影響され易いものなので、勉めて善良なる習慣を身に付ける様に常日頃から心がけるべきなのです。

個人は各々その性質、形体、環境において異なり、決して人の倫理観は画一的なものは無いのです。

（それは無数の木の葉の中で全く同一のもの無きが如くなのです）

なので「善良の生活習慣をつける」にも決して画一的な方法、一定の規則で全ての人に当てはめることは出来ないのは当たり前のことなのです。

その善良なる習慣を心がけることは他日社会に出て社会･体制の一局の機関のことだけに止まらず、全ての事象は進歩するに従って活躍分野が細分化し、益々、その先鋭化して行くので、その心構えが必要とされるのです。

故に君達は今日より自分自身を分析し、自己を知って、その特徴を活かして世界の人として後世に評価されることを意識し、最良の道を以て社会に出て一方の将（トップ）を目指し、自ら切り開くことが大切です。

その能力はあっても、一層抜き出た特徴が無い者は平凡の人物にて決して社会に出て重要な人にはなれない。

君達は今日より以上の点を心得て、益々、自らの意志で選択した方向に進むべきです。

準備を怠らぬように、学校に於いては、ただ、学科を修めるのみではなく、並行して人格の品性を高め、他日成功の準備、即ち自らの将来の目的に必要となるものを得ることに教えを活かせて欲しい。

人が長所とするところは、即ち天職がそこに存在するのである。みだりに他の方向に行こうと思い悩み、努力するのも勿論進歩延々にして、或いは遅かれ早かれ元の道に戻るものならば、その時は全く甚だにして他人より後れるのところと成るので、その初めを獲ることが大切です。（自らの長所を活かせて先行先取が大切）

成業の準備について、即ち修養には二つの方法がある。･･･一つは積極的にして、他は消極的である。

●積極的とは前に述べたように自身が長所とするところを、将来必要とする習慣を身に付けることであり、

●消極的とは将来の成業に不整合となり、妨げとなる悪しき習慣を今日より矯正する心がけが必要です。

要するに、先ず自己を知ってその欠点を補い、長所は益々活かし高めることです。

前にも述べてきたように、人は精神の器、又身体それぞれ相関すると同時に、その境遇・環境が異なる、皆さんは自身の特徴を顧みて、活かすべき長所を見出す事です。みだらに夢に採りつかれるのは良作ではない。（夢・志しは遠大であるべきですが、実現の為のステップを考えることが大切）

君達は将来、社会の必要に応ずることを目指し、或る特色を有する先駆者となることが求められています。君達、青年が偉人の伝記その他を好むものではあるが、これらは善良の事ではあるが、読む際に注意すべきは偉人の行為をそのままその通りの事をしても、往々にして不整合を生じる事、それは偉人の時代・環境を考えずに、その行為を学ぶのは誤りです。（偉人の精神は活用しても、その行為を直ちに応用するべきではない）

人格の実現には二つの面があります。　一方は実用的となる部分と他は原則的で理想的な部分です、
人はその両者の結合を欠いて一方に偏り易きものです。

●理想的な品性を高尚にするとか云う実現性の無い精神を論ずる人は空想的な者となり易く、一面に偏った（実用性に欠く）不用の人物となってしまう。

●実用的とは只、身近な俗事に奔走するのみにて精神的に未熟な者で、往々にして俗人となる傾向にある。
特に皆さんのように授業を受ける立場の者においては俗化し易いので大いに注意すべきです。

人は善を好むと同時に悪を嫌い排斥する習慣を身に付ける事が必要である。
人にはお互いの人権を侵害し威すが如き、実は臆病な馬鹿者である。そのような人に成ってはならない。
曖昧の人物となるのではなく、明瞭なる人と成るべきです。**（自ら積極的に発信することが大切です）**
私の授業で最も必修すべきポイントです。

中島力造

人生の岐路に対する選択のまとめ

自己の人生の岐路にあって、何が果たして重大なのかを見極めるのは容易なことにではないが、
人生の選択の際は愚かな考えで両親や愛する人の怒りを受けてはならない。
（決して、自己の裁量のみで決めるべきではない。必ず、両親や愛する人の理解が必要なのだ！）

要するに自己にとって、人生における本務とは絶対的のものではなくて、相対的なものと思うのです。
従って、自己の考える人生の岐路に対する選択とは、一人には必ず一つの備わった器に一つの務めがあるのみ。
（人には一つの備わった器があり、自己の裁量で選択すれば限界であっても、周囲の理解と支援で器は拡大する）

謂うところの岐路の選択とは何が大小軽重を判別する事が困難な場合のみ、初めて倫理学の適用を考えるべきだ。
（学問の効果はある究極の際にきわめて顕著となるものであって、平素の場合にはそれほどでもないのだ）

謙祐

玉不琢、不成器矣.　原石は磨かなければ、宝飾器とは成らず。人生の目標に向かって自身を磨き上げること。
人不学、不知道矣.　人は学習しなければ、道理を知らない。
学而不思、則罔也.　学習しても、思慮がなければ、考えが狭く、知識は水を網で受けるように抜け落ちてしまう。
思而不学、則殆也.　思いだけで、学習しなければ、殆どまぐれ当たりのようなもので、稀に正解しても続かない。
知而不律、征利己.　道理を知っていても、自らを律しなければ、己の私利私欲に捉われる。
交征利己、而国危.　それぞれが、己の私利私欲に捉われれば、世界・国全体を危うくする。

思・学・律、智慶太志.　思慮と・学習と・自らを律することは、智への慶びと太なる志をもって行うことが大切です。
慧聡真摯、以為悳.（※1）　智慧を整え、聡明に真摯な姿勢でもって、人格の実現を目指して、(七)悳を積むこと。
悳不孤、必有隣矣.　(七)悳を積み、正論で接すれば、決して孤立することは無い、必ず同志は隣にいる。
一期一会、以為恩.　人との出会いは一生に一度と心得えて、周りの方々の恩恵で支えられていると感じること。
日々好日、以為悟.　その日、一日が好い日であった、と云えるように覚悟を持って行動することが大切です。
交悳・恩・悟、而国和.　それぞれの人が、七悳をもって周りの恩恵と慈愛を悟り、接すれば、世界・国全体が平和となる。

栄枯盛衰、倣世也.　それでも、何人も如何なる国も栄枯盛衰は世の倣いです。
諸行無常、世虚仮.　あらゆる事柄・物事の永久不滅は有り得ず、世の中の全ては空虚な仮り物のようなものです。
知恩知足、不飾虚.　世の中の恩恵を知り、自己の私欲を抑えれば、空虚な飾り物に頼ることはない。
七敵八苦、八正道.（※2）　（仏陀の悟り・教え）
悳・恩・悟、和而不同.　(七)悳を積み・周りの恩恵・自身の悟りで調和すべきで、思慮も無く相手と同調は好くない。
以和為貴、宗無忤.　世界の人々が和を貴く大切にして、逆らい事を無くすべきだ。(～聖徳太子・十七条の憲法第一条)

（ここで、悳とは徳の元来の文字です。信条に真っ直ぐに向き合う心を持つ、の意味）
（※1）七悳＝仁愛の悳・正義の悳・誠信の悳・節制の悳・清浄の悳・勇気の悳・智慮の悳
（※2）七敵＝避けられない事象（病気・飢え・裏切り・嫉妬・欲・老衰・死）
八苦＝避けられない苦しみ　（生・老・病・死への苦、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦）(※3)
八正道＝対応策としての悟り（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）
(※3)五蘊盛苦＝色(肉体)・受(感覚)・想(概念)・行(感情)・識(心) が不安定となる苦しみ

日根乃主　もっタリ